「お使を下さいます以前に、他々のお客がございますれば、其の方へ譲りますが、お差支へはございますまいで、へい、此の儀を一寸承はり置きますので、へい。」

「可いともな、だが、買手は、まあ、有るまいよ、ふゝ。」

と片頬笑をして小間使の顔を見た。

途端であつた。

「お爺さん、私に頂戴」と、いきなり美しい女が手を掛けた。花政より前に、發と牡丹が薫つて、花片が頷いた。

さすがに顔を赤うした、子爵夫人は、濃い眉を動かして、じろりと睨むだが、

「これ、涼傘に泥がつく。」

と小間使を睨直して、ものをも言はず、ツンとして出合頭。

「豆腐ういー。」と、櫻街樹で濡れた荷が出抜けに擦違ふ。

「あら。」と奥方の涼傘を庇つて、小間使が、ひよいと退く。

「豆腐ういー。」

三

「其のかはり此方は月賦よ、七圓だなんて私、差當り……煙草もない。」

と袂を返す袖裏の紅羽二重、霞むだやうな瞼で、袂を覗込むだ樣子は、娘らしく仇氣なかつたが、卷莨の上包みを引捻つて、ポンと投つたはあられもなし。

「喜代公、お前持つてるだらう。差上げねえ。」

爺さまに然う言はれて、若衆の一人が、どんぶりから卷莨を出して、

「お龕末です。」

「一寸、隅ッ子に只を一ケ所、振出しの金米糖だね。ねえ、喜代公。」と花の中の、件の百日紅の腰掛に、悠然と裙を落す。

「矢張り月賦で買ひますさうでね。」ともう一人の若衆が言つた。

「おまけに、名前までお覺えなすつた。」

で、喜代公は苦笑。

「覺えないでさ。月賦の方は忘れても……ねえお爺さん。眞個に借りるのよ。」と落着いて、灰を拂いて、串戲では無いのである。

「えゝ／／……牡丹一輪、金七兩。黄金緣の大年增が買ひ人はあるまい、とさました處を、づばりと買つておくんなすつた、ものは氣合だ。何ね、たゞでも可うがすが、それぢやお前さんが御承知はなさるめえ。……實はね、一枝二分で可いんで、科と言分が癪だから、倍と吹掛けた處を、お前さん、一圓と訛つたから、七圓と押被せた。こゝ等が町内での軍師さね。」

「お父さん、餘りだわ、私ひやゝ／／した。」と格子の裡から、娘の緋鹿子が白い顏。

「祭禮の腹癒せよ。ねえ、お前さん。」

と今度は爺さん、美しいのゝ卷莨から、ぱくりと雁首へ吸着けて、

「去年は影祭で沙汰なしさねえ、此の夏だ、お前さん。町内揃ひの提灯で、若え衆が、あの邸へ渡りをつけると、幾干がもんだね、二分にや足りねえ入費だ奴を、お上へ申上げた上沙汰をいたす、さね、何うでがすえ。三太夫も三太夫だが、お上が、とかみのえみためでね、お聞濟に相成らんでがさ。花政入道ぢやねえけれど、町内これで齒が拔けた。提灯二ッ、暗夜でがせう。景氣ア惡いやね、え、お前さん、御神輿は納つても、入道が納まらねえ、其の實、兩足納つちや居ますがね。

まだ其ばかりぢやあゝりませんや。手前どもへも、出入りのね、植木屋が彼の邸へ雇はれたが、ね、お八ッの茶を出さねえ。言種をお聞きなせえ。英古利ぢや午後二時頃、菓子も珈琲も飲食をしねえとね、何うでがすえ。其のかはり倫敦ぢや牡丹一輪七百弗だ、金七兩は直でがせう、はゝはゝゝ、」

「まあ、」と肩の辷る羽織の襟を、たをやかに、紐を引いて引寄せながら、うつかり嬉しさうに聞惚れて居た美い女が、ハッと其の手を胸へ當てた。

「あら、誰、私の名を呼んだ。」

唯、爺さんも、きよとりと目を放して、ひく〳〵と眉毛を額へ。……若衆二人も、ひよい、と恁う其處等を見廻はす。――成程、變な聲が、おわか、わか、と言ふやうに響いたのである。

「誰？……一寸、喜代公だね。」

「壯、壯ン。」

喜代公は、頸を窘めて、一つお辭儀で、

「いよ〳〵お覺え下すつたのは難有い仕合はせでございますが、私あまだ、根ッから、へい、貴女の御名前を存じませんので。」

「ぢや何ですかい、唯今の。」

二人が揃つて顔を見た。――一人は枝の鋏刀を控へ、一人は根揃への手を留めて。

「えゝ、わかよ。月賦だから覺えて下さい。性は錦木、名は和歌子、……鶴女とは申さない。和歌の方、和歌の前、和歌子、馬鹿子、……一寸、むき身を賣るやうだわねえ、」と獨りでくす〳〵襟に腮を差入れて、唯うつむくと不思議なほど品が可い……が又媚かしい……緋の肌襦袢が、ちらりと雪の頸を覗いて、紅筆でかいた艶書の趣。

爺さまが頭を掉つて、

「串戯ぢやねえ、何だい、今のは。」

「あら、與四郎よ、お父さん、」と、娘が言つた。

「何、與四郎か？」

「花藏の中で、また木蒐をなぶるんだわ。」

「あゝ、然うだ。」

「花藏だ。」――若衆が聲を合はす。

「彼ン畜生、何時の間にか使えから歸つて來せて……ちよろりと花藏へ潜りやがつて……何うするか、見ろ、野郎。」

爺さまは、腰に提げた手拭を、兀頭へ引捻つて、一ッ辷らしながら、下葉を引分け、藏の縁へひよこ〳〵……。雨がまゝ一時、店の草も颯と暗い、穴の上から浴せ掛ける。

「與四、與四郎。やい、與四公。」

唯、返事もせず咒咀の如き地の下の異變な聲、

「いろはにほへと、アイウエオ、いろはにほへと、アイウエオ。」

唯、黄色な猫の目が二ッ、下にも二ッ猿眼、四ッ目のある怪ものが、穴の暗さを糶上つた。

と、云ふものは、一羽、木蒐を入れた金網の籠を兩手で、手代能が頂く桶の底抜けて、と言ひさうに出額の天頂へ捧げながら、面巾廣き鼻ひしやげで、横撫でをひかつかせたのが、穴から階子を踏むで出た。

通街八方、是沙汰の惡戯小僧。電信柱と相撲を取るやら、郵便箱の上の鯱鉾立、黑板塀で芝居のたて、假聲は使ふ、浪花節は唸る、喇叭は吹く。就中、得意は自轉車、諸鐙をガッシと合はせて風車の如く乘出す、と爺樣が大好きの講釋種を横啣えで、間垣平九郎藤原忠世と號し、はいヨーッ……矢聲を放つて、鞍上に人なく、鞍下に馬なしだ、それと驅けながらの匍匐が、其のかはり花主さきへ持つて行く、束にした花は枝ばかり、菊も、椿も薪雜棒。

「おや。」と、とぼんと落馬して、路傍の溝へしよんぼりと遠見の折助、半纏着の間垣先生、身を投げさうに立つかと思ふと、

「そんな、手つきで金魚の餌が掬へるかい、貝杓子を貸しねッたらよ。」と、小兒の手から引奪つて、蜜柑の皮を搔廻はす。

此奴が、花藏の中からすぽりと出ると、腰のかひない爺樣の捉まへる手が及ぶものか。一足立に、ひよん、と飛んで、店を見て居る娘の前へ、角兵衛冠の木蒐籠、ばッと掉つて、も一つ飛んで、

「ほッほう！」と其の啼聲。

「あれえ。」

緋手柄を飜然と紅く、薄暗い奥へ眞白な踵で遁込む。

「へい、えゝ、光らしてるばッかしで、晝間まるッ切見えませんや。えゝ、目が見えねえと薄のろく成つて覺えませんからね、暗い中で、晃々さしてる處で、いろはから行つてるんです。

……いろはにほへとちりぬるを――」

與四郎は素早く美しい女と話をはじめた。

和歌子――美い女もまた、もの好に小僧を庇ふやうに、腰掛を離れて立つたから、形容にも一つお打擲申さうとした爺樣の皺びた拳固の遣場が無い。で、裏を返して額際を引擦つて呆れた顏色。

「烏と云ふものはですな、私の考えぢや、嘴を開けて聲を出すもんでせう。」

と目を据ゑて、大意氣込な赤い面して、和歌子に話しながら、爺樣の顏をきよろりと見て、

「……えゝ？　お爺さん、然うでせう。」

「何、何を言やがる。」

「それだもんですから、あの、（わァかァ。）えゝ、此奴なら覺えるだらうと思ひましてね。……わァかァ――」

柄にもない、小僧は清い聲である。

「やつて御覽、もう一度、……よ。」

「えへゝ、……少しばかり極りが悪いや。」と、籠をふらり。坊主のやうな一分刈の頸窪をごり〳〵搔く。

「極りが悪いが呆れらい、べらぼうめ、お客樣の前ぢや撲倒すわけにも行かねえ。」

其癖、爺樣は、撫でさうな手つきなり。萎えた掌、今度は苦笑ひの口の蓋して、

「御聞きなさいまし。――餘所からね、お前さん、其の木蒐が來てからッてものは、間がなの隙がな、こびりついて居やあがつてね、途方もねえ、大丈夫口を利くだらうで以て、睨みッくらで、いろはにほへとを遣りますぜ。鸚鵡や九官鳥ぢやあるめえし、木蒐がいろはを覺えて堪るもんですかい。處を、奴め、餘り夢中で、些と取逆上せた氣味合でね。何うやら木蒐が憑移つて居るらしいんで、御覽じろ、顏色を。向合つた處は宛然、面形を取つたやうでがせう……串戲ぢやねえ、なあ、喜代公、段々相格が肖て來るぢやねえか。」

「眞個ですね、お爺さん、團栗目と云ひ、出額と云ひ、そら、恁う云ふ中に、口唇を尖がら

かす工合がね。」

與四郎は唐突に一本足で、ひよい、と飛んで、

「ほッほう！」

「可厭。」と、娘のやうに、優しく、柔かにはッと退く、褄の搖ぎに、飛模樣の絞つた緋が、花屋の店の花の中に、雨を誘つて、ちら〳〵と白脛すれに尙ほ燃ゆる。——雲暗くして、凄艶である。

構はず——敷散らした、花に葉に、羽織の裾を引くばかり、今度は和歌子が、土間に蹲むと、早や其の主に心優しく、牡丹が色を映添えて、蓑蟲が化けた體の、木蔦に對した面影は、鬢に時雨を掛けながら、瞼が颯と晴々しい。……

「お爺さん、何處で、こんなものを捕へたの。」

美女であらうが、小僧だらうが、人氣勢の寄るとさへあれば、胸毛を搖り、下搔の翼を煽つて面一杯にぷうと膨れる。這奴禽中の河豚なるかな。かしりと留木を蹴直いて、

「何だ、こんなものとは。」……きゝ耳の押立つ事、毒ある鰭を振ふに似たり。

「河越の在でがすよ。」

「え、河越の。」と……聞返す。

「なあ、喜代公。」

「え〻、入間の在です。」

「埼玉だわね。」

「武州埼玉縣入間郡、伊草村だつけかな……花を買込みに近國を廻りますものがね、百姓家で生擒にしたと云ふのを、栗と一所に貰つて來たんでございまさね。」

と花政は剪刀をちよき〳〵、カラ鳴りの手ついでに、一枝白菊の葉の蝕を拂つた。

四

話を進めよう。

埼玉の入間郡、伊草村で生立つた、不可思議な百姓一揆の斥候と云ふ形の鳥は、此の日、和歌子の錦木の宿へ、花政の店から籠ぐるみ引取られる事に成つた。――隱居に何も木蒐引の道樂あつて、望んで取寄せたと云ふではなし、栗も團栗蕎麥殼ぐるみ、苞に引包みに成つて江戸へ出て……第一囮に使う、あの、木の葉木蒐と云ふのでない。札つきの怪禽、肩がきのある無宿もの。餌は活餌で、豚ぎらひの、牛も小間切では納まらず、鼠も胡麻で揚げろなどゝ、稻荷のおつかはしめ位な贅を言ふ。剩へ娘があれ〳〵恐がつて騷ぐ始末。

「え〳〵お引取を頂きませう。願つたり合つたり。晩の餌に買込んだ竹の皮づゝみと、金網の小屋は引出ものに差上げます。」

何の洒落だか、一人ものだからお婚さんに欲いわ、讓つて頂戴、と和歌子の言つた時、二言となしに爺樣が承知した。娘が嫌つたのも事實であれば、それに何の不思議はない。が、――やがて、此の魔鳥が、おなじ素性の知れない美しい、女の着古した長襦袢……然りとは雖も、土佐繪に描いた篝火ほどは燃殘つた縮緬の袖で拵へて着せた、手縫の一重の外套を翼に掛け同一緋の頭巾を頭に卷いた頰被りで、殘月琵琶の花に落つる時、霜の水銀の如き高甍の棟を傳つて、子爵槇ヶ原家の破風口から館を襲ふ事に成るのである。――苟も三國一城を領した、角屋敷の要害を碎くのである。此を使つた美女は、其の夜は、綠の黑髮を背に捌いて、練衣の氷なす白衣にして、星より高く城の塀に立つのである。固より、それは後の事。

序なれば、白衣の次第を言つて置かう。……

此の女が自から言ふ。――嘗て、露西亞、柴拉利亞（はぶるすか。）に渡つて住むだ事がある。たしか、政府が第十一軍團を置く土地で、軍隊を對手に東西各國の商人が入亂るゝ。……これも商賣、と言ふべくんば、第一紅い蹴出しに長靴を穿く、本朝天草產の女の身。南京の寶玉商人、北京の蜜柑、林檎賣。朝鮮の土方。印度の水賣。ほるとがるの屠牛兒。米國の銀行家。佛蘭西の仕立屋、宣教師。倫敦の土木受負。土耳古の雪車曳、馬車屋なんど、人あれば火あり、火あれば雪あり、雪あれば風あり、そして横町に一つ宛黑い波のある中に、和歌子の居た丁どの隣家に、貓太人の藥舖があつた。主人は陰氣な、人の可ささうな苦い顏した男で、五つばかり

も年増らしいが、容色の可い、目の鋭い女房が、星を占ひ、禁厭をし、祈禱をする。神巫だ、魔法使ひだと風説した。十八九に成る娘が一人。色の白さと言つたらない。別けて、黒髪を肩に流して、雪白の寐衣姿、蒼い蠟燭を灯して寐室へ階子段を上るのが、婦人の目にも悚然として美しかつた。……其の娘は日本長崎から傳來と稱へて、支那人から買つた、乙女、白玉とりぐに、椿の鉢植を、吹雪の窓、煖爐の燃ゆる火の傍に、眞球の如く、紅玉の如く鐘愛した、——と言つて、近隣のものに話す——

これを可懐むのであらう。居まはりでは、和歌子の、白衣で黒髪を垂れた裝で緣の雨戸に、蠟燭の灯を照らして、雨を見、蟲を聞くのを知たのがある。此で、其の話の中の女の狀も偲ばれて、尙ほ其にも勝らうと思ふのに、眞似にも事を欠いた、品にもこそよれ、神巫、魔法使の娘だと云ふ猶太をとめの闇のひそみに傲ふとは何事だらう。——これだけでも、其の性の知れない婦人であるのは言ふまでもない。斷るまでもなく、此の女は、町中に、唯一人住である。錦木和歌子と云ふ優しい女文字の門札は、覆町、花政の大通りと家數八九軒、横へ曲つて商人交りの屋敷町の端を、路次を入つた突當りにある。すぐに隣町からぐるりと塀を押し廻はした槇ヶ原子爵の邸で、錦木の宿は、恰も其の裏庭の地尻めいた處に、窓から唯一重杉垣を隔つるのである。

夏のはじめ、町内へ小さな虹の立つたやうに、浮草の根を留めてより、以來、生立も素性も今もつて誰にも分らぬ。……名と容子で、はじめは、知らないが、女優かな。やがて琴曲教授、と云ふ札が出た。はゝあ生田流のお師匠さんだ。が、軒に風鈴の音もせず。かはつて、つゞれさせ、秋の虫の、萬御仕立物所と成つた。しめたわと男どもが綻びを切らして待つと、……女髪結。

最も人を驚かしたのは露西亞語研究所と言ふのである。然し、其のいづれにも、弟子も註文もあつたらしい樣子を聞かない。……勿論其の看板たるや、衞生組合、大掃除濟の札ぐらゐなる大きさで、紙切に記して貼つて置く。

「豆腐屋さん——油揚はあるかい。燒いたのが欲いのよ。……一寸、天麩羅見たいなもんだ

けれど、油揚は生ぢや不可いぢやないか。……そんなものは無いッて……不自由だね。燒豆腐を拵えるついでに、今度燒いて來ておくれな、後生だから。」

成程、小婢も婆やも要るまい、――飯などは滅多に炊かないと言ふ。

麭麵と、大概はハム、サラダ。ハムが無ければ皿サラダ。三日ぶりぐらゐ洗つた菜を積んで置いて、箸の尖ではさめば濟む。食卓に一人頰杖で凭かゝつて、手綺麗に麵麭を裂く。あとは紅茶か珈琲と云ふ處を面倒だから硝子杯を以つて路次裏の共同水道へ出て武藏の名水玉川を傾ける。もつと手輕なのは卷莨を横咥えに懷手でスッと出て、

「御隣家の奥さん、硝子杯でも、茶碗でも。――壞して了つたから。」

但し、工面のいゝ時は、朝から、てん屋もので酒と知るべきもの也。で、其の擧動は空を飛ぶ鳥よりも自由である。が、地上に巢くふ人間は彼の女ばかりでなく、魚もあり、獸もあり、別しては、妙な、變な男と云ふ、頭の工合から、手足の格好いづれ不出來だけれども柄の違つたものが居る。何故か、何う云ふわけだが屹と居る。其の如何なる種類の男が、出入るかは、暫時、讀まるゝ方の想像に任かせて置く。

唯、當日、和歌子が通街の花政から家に歸る時分に、路次を入つて、共同水道を前にした、其の錦木の――此の頃は圍碁指南と札を貼つた――格子前に立つた男を紹介する……手織縞千筋の布子に、紺小倉の帶、髪を角刈にして、片手に番傘、中古の萠黄の風呂敷を、ぐにやり肩に掛けた、背のひよろりと高い、にきびのふいた若いもの、生々しいは顔ばかり、皺切つたる風俗。はてな、妖にして艶なる主婦は、血の道の藥か知らず、持藥に八ッ目鰻の乾ものを用ゐるかと、不圖見て思はれぬ事はない。が、然うでない。飯倉片町に老舗の質屋、孫田屋六兵衛孫六の年期ものの中に、正直と勤勉を以て聞こえた、子弟の模範者たるべき、二十二三の年配が、然も名を佐兵衛と云ふ中手代、欽すべき、二宮尊德の崇拜家である。

風呂敷の空虛なのは、嘘をつかない象徵でなければ、質を持參したのでない。實は引奪りに來たのである。……此の機會を以て、棄利と云ふものを御存じない方々を祝福する。抑々棄利の所因たるや、自分の衣服を損料で借りて、着たまゝそつくりと剝がるゝのである。

時に、通街の花屋では、雨が未だ留まないから、持物はあるし、與四郎が和歌子を送る事に成つた。

「兄弟分だ、手前、背負つて行ねえ。」

言ふにや及ぶ、此の小僧、悪戯の手があけたいから何でも背負ふ。木蒐の籠を背中にゆらりと金網の紐を咽喉へ廻はして、花政と書いた番傘をさし掛けた。

「お爺さん、然やうなら――一寸後見つきの輕業だわね。今度招魂社へ出ませうか、喜代さん、御贔負に。よ、」

と媚かしい掛聲で、軒下に引束ねた、南天の實の紅を、溝板越しに飜然と出る。褄より、引提げた牡丹が搖れて、濡地に映す淡い影。

「ほッほう。」負けない小僧が、一本脚で身振で跳ねると、ぷッと膨上つた木蒐は、目でぴかぴかと眞い稻妻、森の祠を思はする、街樹の落葉が二ッ三ッ。

油のやうな道の時雨に、白木の駒下駄、撫肩の後姿を、若衆も手を留めれば、爺樣の腰も軒に伸びて見送れば、曲角が何とか云ふ質屋の黑塀、少し坂に成つてなそべに低く打つた忍返しに、悪戯小僧の、高々と上げて一つ廻はした番傘が引かゝつて、雫をしたゝか、袖をすぼめた、あの地摺なる牡丹の色が、其の時寂しく青く見えた。

雨やゝ暗し。……

「茄出し饂飩――」

五

質屋の手代は驚いた、こんなに肝を潰した事は嘗て無い。時雨の暮でも、まだ日の中なればこそ、路次を驅出したくらゐで、一ッ番傘で身構へて立直つた、が、夜で見よ、すぐに氣絶。

「お留守なのかな、御免なさいまし。」

一度格子を開けて見たが、下駄が無い。平屋で淺間なのが、火の氣も無さゝうに冷え切つて居るので、名さへ篤實な佐兵衛であるから、丁寧に腰を屈めて、江一格子を潜つて出た。餘り

つか〳〵と城の門を入つたので、寂寞とした樣子の不氣味らしさ、濱松の大手を武田の陣笠が窺ふ體で、出直して戸外から、もう一度、

「御免なさいまし、……御免下さい。」

勿論返事はない。

其の實、境木敏夫と云ふ、文展を落第した、何某學校出の、髪の長い、色の白い薄髯の生えた秀才の兄哥が――此より前、留主へ入つて、待草臥れて、緣側つきの奥の六疊の眞中に、兀げた一閑張の卓子臺を小桶に取り、薄搔卷の天鵝絨の襟、白粉の薫と女枕の鬢の香に、綿は落ちても、赫と温つて、背の高い男だから紺足袋の足を裾へ突出し、然も頭は引被つて、馴染に振られた引すぎほどに、目も心も暗に成つて、小庭の山茶花、艶に出て、時雨の玉水樶へ走る點滴を、隣家へ外れた土草履の音の思ひで居る處。待つ身にふゝてた了簡には、恁る折から男の聲は、劉備玄德でも、時の内閣の大臣でも嬉くない。況んや掛取の米屋、薪屋、もしそれ然らずんば嫉むべき鞘當筋と、内證を知つて寢て待つくらゐ要害を心得て、棄利の使者の佐兵衛如きに返事をすべき若武者では無かつたのであつた。

雨は冷し……霞町に近い處、また出直すも臆怯で、佐兵衛は格子前に、ひよろりと立つて、所在なさゝうに眴すと、背戸へ入る木戸があつて、さすがにこの錦木の宿なれば、柱も扉も鏡立ての形に見える。が、熟した念入りの糸瓜が一ッぶらりと下つて、朝顔の交つた葉が枯々に葬を絡ふ。一輪、芥子ばかりに、後咲きのあはれを夕暮近く、薄淺黄の、寒き、朝顔の花ありの……。糸瓜を顔に枯葉の衣で、其の朝顔が鋲に似た唯一の胸の寶玉、露西亞の貴族が妖艶にして婀娜たる魔法使のために、骸骨に成つて、會堂の屋根に曝しもので、振ら下つた……とも見えれば、こゝに、胸に眞珠を含んだ美術家が、和歌子の色香に、みいらに成つて、忍ぶ垣根を魂の徜徉ひつゝある風情にも見える。

とも思ふまい。二宮佐兵衛が、薄ぼんやりの癖として、正直まつとう、傘は、傘は、開いてさすのが色とも知らず、故と疊んで、石神に似た油紙の太い棒にして、篤實に、兩手で持直して、件の糸瓜の、鉢な、佐野の馬の面めいた鼻頭を、トンと蜻蛉で突上げた。

「はくしよん……」

唯、鬼瓦が蝙蝠を吸つたやうな、へんてこな嘘をしたと思ふと――魔はこんな時に魅すと聞く――直傍の物置の戸が開いて、ひよいと顔はれた妖精一體……呀、これにこそ驚いて佐兵衛は露地を驅出したれ、夜だと目を眩すのは此の事で。

また、物置と云ふのが、これも麻布だけに氣の知れない、七不思議にも算へやう。向つて格子と、並んだ其の木戸との間を横に切つた羽目板に、密柑箱を重ねて打着けた、と云ふ疎末な設計。家ぐるみ、ぐるりと背を向けて、(千手觀音をがんでおくれ。)とアイヌ出の順禮が厨子を向けた形がある。――空地の無い切なさに、誰かゞ苦しまきれの經營であらう、が、それも雜道具あつての事――今度の借主に成つてからは、炭俵に三俵法師、おもなるものは紙屑を一杯に突込むだ、鼠の巣だか、犬小屋だか分らない。

傘の蜻蛉で嘘を合圖に、辻堂の武者修業、裡から出たは、そも何等のものぞ。唯見る、身の丈三尺に足らず、(――あの、槇ケ原子爵家に飼つて居る、仔細あつて町内界隈迷惑な)――洋犬の背よりも低い体、儒、水搔の有りさうな小さな足、だぶだぶと突出た腹は蝦蟆ほどある。頭の毛髪が耳を寒いで、然も、もやしの産毛めいて獣の膚に異ならず、頭がこけて額が小さく下膨れの頬ばかり浮膨を持つて黄色いのに、口がやがて耳たぶへ、唇の小皺をえぐつて、眉間に深い皺と丶もに、爺かと見れば童なり。血走つて眼が赤く、眉毛なし。瞼から兩の頬へ掛けて、てらてらと赤膚に剝けたやうで、そしてギザ〳〵の筋が入つて、粘を帶びて、じと〳〵して、腐つた西瓜に髪髯な處へ、また嘘のやうに、頭の皿が凡げて居る……

うまくない。恁う記しても、彼奴の形骸は寫されぬ。近頃は影をひそめて、字書を引いても想像的動物と成つて不都合な。近い處で荒川か。離れて印幡沼に居てさへくれゝば、二字で分る、河童。と同じ人間の、生々としたのである。

だらん、と兩袖の千切れかけた長い袖の、棒縞のどんつくを、青ざめた胸はだけに、裾をびよし〳〵に着て、汚れた綿眞の出た、赤い腰紐を胸高に一ッ巻いて尻に輪にして端をぶら下げたのが、大な糸瓜を横咥えにして嚙りながら、大正年間、世界に於ける大都會、東京麻布霞町

の錦木の物置から、恐れ多くも、天にまします基督に、仕掛けでバタリと樂屋から戸を開けさしたやうに出て、蚯蚓色した小さな手で、件の糸瓜を嚙り〳〵、涎と水涕をだら〳〵、濡れじとりの頰邊と、あの口を、一齊に赫とあけて、白い反齒で、ものをも言はず、ニヤリとして顏を視た。

顏を見られたのが、十五年奉公して質屋に成るのを夢にも忘れぬ、二宮の氏子、佐兵衞である。

「あッ。」

と、番傘で腐を支いて、胸を板の如くに反る處を、赤面の切禿が、鳥のやうな赤い指で、露路口を指して、

「うゝッ、うゝッ。」……涎をだら〳〵と口を利いた。

驅出さずば成るまい、姓は二宮、名は佐兵衞。——時に詰るものあり曰く、談者は、餘りに奇を語る。糸瓜が食へるかと。答へて曰く、妖精ゆゑに嚙るにあらず、薩摩に於ける尊德宗の信者は大名と雖も糸瓜の清汁で七五三の祝に賓客を遇するのである。然うした向の說を聞け、冬瓜の葛かけ、病人でゴハンすか、何、芝蝦を入れると？　腥臭。

驅出した佐兵衞は、しかし餘りの事に、番傘を握つて、退りながら、町から、露地の奥を覗き込むと、侏儒は雨の中で朦朧として、且つ消えず。油繪で塗つたやうに明かに正體を留めて、お剩に花政入道の其の如く、前屈みに腰を屈めながら、赤い指で、また指示する。……其の指で、繰られた體に、ぼんやりと踵をまはして、佐兵衞が見遣つた町中の、早や其處へ、與四郎小僧のさしかざす、傘にも映る牡丹の影、友染捌き艶麗なり、羽織の黑も艶墨に、浮いて揚羽の蝶の紋。

「すて利だ、あれを剝ぐのだ。」と、一懸生命に念じながら今、來かゝる辻の紅殼塗の、こんな確なものはない、活きた血の通ふ世界を見つゝ、しかも、其の郵便函を魔道の榜示杭のやうに思つたのである。

南無三寶、近づくと、木蒐を背負つた鳩梟小僧。

佐兵衛は横なぎを啖つて、ぼうと成つた。

が、確りなさい、二宮氏。なかく、こんな事ぐらゐでは濟まない。

「おや、お早う。」

晩方だのに――和歌子が莞爾。

「來たね、彦ちやん、おい、彦六。」

きよとんとして顔を見た、が、媚かしい人の聲に、性根が漸と戻つて心着いて、

「えへゝ、孫六の手代佐兵衛ですよ、彦六ではありませんですよ。」と、眞面目なもの也。

「生意氣お云ひな、三途河の婆さんの、其の孫のまた使ひぢやないか、難有くお思ひ……彦ならば結構、曾孫で澤山、眞個は細螺だあね。――おいで、彈いて上げるから、」

と澄まして露地へ入るのを、背後から隨きながら、入口で立留まつて、おつかな吃驚、保儒を透かして覗く。

一度、婀娜に細面で、眉も目も、くつきりと白く見向いて、

「おいでな。」

と、も一度莞爾した。が、唯振返つて、保儒を見て、

「おや、芭蕉實、お河童、ハイカラだね、一寸。」

「うゝッ、うゝッ。」と、再び指す。

入り掛けた佐兵衛が又退つた。

「留主に來たッてんだらう。分つたよ、難有うよ。寂しかつたらう、其の代りね、お友だちを連れて來たよ。」

さすがの與四郎、一本脚で飛べもせず、これには恐れたらしく、羽目について横摺りに退下る。

其の背の籠を、トンと叩いた。早まつた――連れて來たと云ふ友達は、木兎の事である。

河童は、扨は、和歌子が飼つて居る妖精らしい。

六

實は、此の秋の彼岸に、和歌子が雜司ヶ谷の方へ行くと云つて出掛けた。其の歸途に連れて歸つたものである。

「御參詣でございますか。」……はじめ、訊く者は、殊勝な墓參だと思つた。

「否、花を摘みませうと思つて。」

黃昏に、炬火の如く、角の酒屋の店を赫と燃して町内へ入つて來たのが、(月見草もまだ咲殘り、嫁菜の花、萩も思ふまゝの折からを、)雁來紅、せめて薊でもある事か、曼珠沙華？　で、そればかりを、薪ほど束にして、あの異相醜惡な侏儒に背負はせて歸つた形は、可怪、狸の背に火を點して、山姫が來たやうに見えた。

「變つたおもの好で。」

「はあ、まるッ切獨身なんですから、心細いんですもの。不意に息を引取りました時のお線香がはり。冥途の炬火にするんです。」

あの、糸瓜の木戸にも五六本、床の間から手水鉢、小さな庭へもすく〳〵と突挿して、當時は月夜に赤かつた。……此の魔の火の灯れた中に、窈窕たるのが下髮で白衣で、蠟燭の燈で、赤爛れの面の侏儒と、卓子臺のお取膳、白丁から直接に硝子盃の冷酒を煽つて、サラダ菜を突いた處は、此の世とまでは云ふまい。日本國にあるべき事とは思はれぬと、霞町にも、隨分、婦人の嫌でない男は多いが、いづれも垣間見て舌を卷いた。

扨、露西亞の錦木塚とでも言ひさうな和歌子の宿へ來た、侏儒は、其の日、池袋から拾つて來たのだと言ふ。

甲武線の彼處で、其の曼珠沙華を引抱へて乘つた電車の中に、和歌子と隣合つて、秋の彼岸と云ふのに絞の浴衣に、唐桟柄の古半纏、白い湯具の裾端折、脚半に白足袋、日和下駄、剝具絞の手拭を吉原被りにした、汚い風呂敷包みに片足を乘つけて、煙草を飲んで居た、鼻の高い目の冴えた色の白い、眉毛を落した大年增があつて、侏儒が、ちよん、と、其の肩へ腰を掛け

た形に腰掛へ立つて、べろ〳〵舌の尖で、硝子窓を舐めながら、田畑を視め〳〵、電車の走るまゝに、ちよろ〳〵と乗合の背中を潜つて腰掛を傳つて歩行いた……

年増の風采が、淺草の馬場裏、新宿の追分邊から出る女猿曳、古女房のおわんわん、蛇遣ひの口上言、と云つた樣子なれば、夜啼石の種小僧か、それとも生のもので、千住大橋箔づきの見世物であらうと思つた。――年増は此程新宿で下りた、が、河童は瓢箪ぶつくりこ、と乗換の電車へ又浮いて出て、和歌子が、日黒で下りた時、後について一緒に下りた。が、手ぶらで何にも無い、ばけものゝ癖に尻尾も無い、勿論、切符も持たぬ。

驛員が持餘して居るのを見て、和歌子が賃錢を償ふと、うゝ、うゝ、と指を嚙み嚙みお叩頭をして、附着いて後から來る。晩方で、野掛の遠出、持おもりのした狐の蠟燭、曼珠沙華を背負はせると、ひよこ〳〵供をしたと言ふのである。

「お給金なし……こんなのでなくつちや遣ひ切れない……」

で、丁稚とも、居候とも、男妾ともつかず、其の日から居てついて、あの、物置にも寐れば、緣の下へも這入む。疊には固より勝手、臺所、屋根を這はないばかりの代もの。

言ふ事は解るらしい、何事も合點〳〵。

「うゝッ、うゝッ。」

が、口が利けない。……然うかと思ふと、七八歳の童形で居て、時々六七十ぐらゐの爺の聲を、前世で咽喉へ嵌込まれたやうに皺枯れた音を出す。恐らく魔界の蓄音機と云ふのであらう。共同栓で、日向ぼッこで、河童獨吟す。

「油虫が煩いわい、うゝッ、うゝッ。」

思ひも掛けず恁う云つたり、……また耄けた聲で、

「姐さんやあ、そろ〳〵水道の水は冷からうねえ。……井戸の水はね、冬は暖あいものだよう。」

「きやッ、」と云つて、ばけつを投出して遁げたのは、家並びの官吏の令孃。

「小母さん。」

若い銀行員が、些と色事筋で、新世帶と云ふのゝ臺所口を覗いて、小春日に甲羅をほしの、悠悠と蹲込んで、

「鰶は魚田が旨あい――。」

小鰺を燒いてた、小母さんが、納まらない、漸と二十の御新造さん。

時に、同番地に草分と稱する、娘の時に高杉先生の顏を見たことのある、長州萩の士族で、野面聲の大い、學校用具店、百年堂のお婆さんを頭領に、町内連判で、河童退治を迫るべき筈の處、天の配劑奇なる哉、不出來しな上野の銅像も、椋鳥のためには、照降の天氣豫報に成るのである。

とも思へるし……悲觀すれば、獸と、鳥と、人間と、洪水と、地震と、飢饉と、戰爭とが、相接近する前兆であらうも知れぬと思はれる……が、此の侏儒を、却つて町内で、祠に祭つて然るべき事が出來した。

他でもない。

横ケ原子爵家に、やがて小牛ほどな黑の洋犬が一頭飼はれる。……館の姫樣、三太夫、御門番に到るまで、此をばトーマスと呼ぶのである。が、面附のッぽで、圖體の大い處から、居まはりの小兒からはじめて、頓馬々々、と呼びなす――

性質は頓馬だが、擧動は猛虎の如しで、辻から唐突にぐわッと食ひつく。自轉車乘は引轉覆る、車夫は溝へ嵌る、自働車はぶう〳〵唸る……ぬッと立つと大人より背が高い、小兒は顚の下に挾まれる。見境の無い事は、館の料理番さへ嚙まれて血塗ろに成つて玄關前へ打倒れたし小間使が島田髷を啣へられて仰むけ樣のちらし髮、羽織を破られ、袖を裂かれて、使ひあるきの女中たち、ひい〳〵悲鳴を擧げる事近所に幾度なる事を知らず。申上げます、電話、はがき、管轄の警察へ注進櫛の齒を引く如し。で、獸醫が警官と出張する。出張する、が、幾度檢診に及んでも更に狂犬たる事を認めない。撲殺思ひも寄らず、小塚原へも棄てられない。元來子爵家の飼犬である。然も其の由緒を糺すと、時の內閣、何某伯の官邸から、横ケ原家へ遣はされたのである。閣下と御前の御聲がゝり、町人如きの言條が通るべき所詮はない。

が、難有い事には、天に神明あり、地に明法あり。夜ふけは何うやら鎖で繋がせる事にしたけれども餘り窮命をさせると、却つて狂犬に成る恐れがあるとて、手加減で、午後の十時を過ぎると解放。さるゝが否や、暗の黑犬、月夜の灰虎、塀の蔭から、垣の下から。

ヤツ、キャツと町内けたゝましい男女の聲々。

狂犬でないのに、何が故に人を嚙む歟。曰く、トーマス饑ゑたれば也矣である――草分の說によると、はじめ大臣閣下から、當所の御前へ、婚入(男犬)當時は、温柔羊の如きものであつた。……が、澤庵の尻尾に冷飯ばかり。トーマスは薪屋の炭俵を嚙み、やがて薪雜棒を嚙つた。床屋の店へ入つて、べろりと散髮の毛を甜めた。中にも女の脫毛を漁つて、ともすると、長い髮の毛を横咿へにして、然も甘さうにしやぶつて、のそつく。そんな時は、あはれなるより寧ろ凄い。……病ではないが、空腹のゆゑに人を嚙むのだ、と言ふのである。

子爵家の御手飼が餓いなどゝ、馬鹿を申せ、……そんな事は、警察で御存じない、勿論、派出所に於てお取上げに相成らぬ。

慘憺たるものは夜遊びの男どもで、漸と工面の出來たのは俥で歸る。……勘定ぎりぎりのなんぞは、早や花政の通街の角から、疑心黑犬を生じて、圖の惡さは、洋服で立窘んで醉も醒め果て、せめて電信の配達夫、とばかり待合はせる。よく〳〵困ると、もり蕎麥を誂へて出前持と一緒に、こツ〳〵。

氣の毒なより可笑いのは、夜、錢湯に行く女連で、向三軒、兩隣。今晩は、今晩で誘ひ連れる。……こゝに一人、陸軍中尉の令夫人、洋杖を支いて先陣を承り、令孃、御新造さん。百年堂の婆さんが同じく洋杖の殿で、上總と房州のお三どのが兩翼に備を立て、長蛇、鶴翼、車がゝり。

「わわわん〳〵。」

あれ、きやあ、ゝ悲鳴で散る、と、お婆さんが夢中で、曳と長刀の大上段。

唯見ると、其の洋杖の持主なる、早稻田の商科へ行く、背高の其の一人息子。

串戲ではない、實は泣くより笑であつた。

處を……天の配劑である――

四邊、八方、トーマスの長面が、胴を畝らして、處嫌はず顯はれると見ると、塀の暗、門の月、何處からでも、侏儒がちよろ〳〵と出て來て、うゝ、と吠えるのにうゝ、と合はせて、這奴餓虎の胴中へ、横抱きに抱ついて、背中へ、うつむけと成つて、ぴたりと乘る、と、其のまま頓馬が、ぐな〳〵と萎えて、赤い頰邊を背めながら、載せつゝのッそり町を行く。即是、河童太子、玄車に乘り、鐵驪に駕し、黑旗を建てゝ暗夜を軌る……

……可怪き額の拔繪である。

和歌子が湯歸りの薄化粧なぞで、唯出會すと、其の天邊の皿を、雪のやうな手でポンと叩いて、

「お河童や。」

近所の手前、河童は餘り露骨だとて、上へ(お)の字を附けて呼ぶ……

「夜遊びかい、……浮氣もの……」

七

「手前より俺の方が驚かい。ものゝ五町とは行るめえ、一跨ぎの使が、もう、やがてこれ二時だ。」

花政の爺樣は、奥の六疊に、夜は樂隱居　寐々衣で、とつちりと膳の前。ちろりの燗、黃鮪の中脂、時雨に通ふちり鍋にも事は缺かぬが、老年の冥加と、先づ〳〵手製のなめものをして行る處、

「惡戯にも、なまけるにも、ものには度と云ふものがあら……馬鹿も手前ぐれえに成ると、呆れが宙返りをして下腹が攣え、な、たとへば此だ。」

と、火鉢の傍へ突出したは紅白の水引、のしめ高で、朝比奈が床几に掛つたと云ふ進物也。

「雜と端書ほどある名札を拜め。子爵槇原家執事、近藤友英と……あゝ、實に勿體ねえ、花政風情へ、紋着羽織御袴で御上使だ。前刻奥方樣に御用立て申上げた傘の御返禮だ。中味を何だ

と思ふ。藁半紙九枚、九枚九枚、と云つても同じ事よ。半死半生と云ふ洒落は聞いたが、こいつは九死一生だ……ものには度と云ふのがある。呆れが宙返りたあ此だぜ。金銀張分のきらびやかなる處の御服紗が掛つて白木の臺着。服紗と臺は下さるんぢやねえ。腹切刀の九寸五分でも御返上申すのだ。此奴を頂戴に及んで、舐めて取つたなあ大星由良之助ばかりだと思へ。——また此下されものを取次いだ内のお光と云ふ奴が、何と、目八分に据ゑて、俺がな、此の燗銚釐へ手を掛けた處へ持出すのに、摺足で、ヲトドン〳〵と言やあがる。彼奴も不出來な江戸兒だ、そんな了簡方ぢやあ、」

と口を大きく開けて、臺所に、嫁のお久と云ふのと一緒に、肴の二番手を見せようと小まめに働いて居る娘の方を透かして見て、フト低聲で、

「な、碌な婚は持ちやあがるめえ……俺あ、もう此の年紀だから仔細はねえが、怎う成ると口より手の方だ。水を浴びせるより火を放ける方が疾えのよ……ものにやあ度と云ふのがある。」

其の癖、叱言の口よりも爺樣はちろり酒の醉が廻つて居て、

「よく、手前、店へ入る處を天秤棒で向脛を打挫かれずに助かつたな。」

仰にや及ぶべき。

「怪我をしてよ、眞個に——」……お光の情で、天秤棒は、高箒とかはつたが、喜代吉は手ぐすを引いて、軒に夕荷の著いた、菊を積んだ花車の蔭にかくれて、手ぐすねを曳いた。——和歌子を送つて三時間強、とツぷり日が暮れてから、其の横町の角へ、與四郎の浪花節……降り來る雪に赤合羽、赤垣源藏武重が（此の義士の名のり誤謬なるべし、少時小僧の口すさみに傚ふ。）と聞こえ出した時である。

「ほッほう。」

少僧は一本脚で、ひよいと飛んで耳へ兩手で木蒐の影五尺。

「此ン畜生……。」が後手に成つて、高箒の柄が流れる。店の敷居を刎越して、突然奥の隱居の前に、倒に成つて叩頭した。手も附けられない次第なのであつた。

「な、但し少々痛えぐれえで性根の附く野郎ぢやねえ、一番は食斷だ。晩飯片喰、處置をして遣らうと思へば、天麩羅蕎麥を四杯御馳走に成つて來たと言やあがる。食はせも食はせた、啖いも啖つた。天道是か、非か、と言ひてえや。――お光坊や、お銚子のかはりめだ。」

「嫂さん。……何うでせう。」

と嫂のお久に、お光が小聲の壁訟訴。……

「お爺さん、そんなに、可い事。」

花政又た、もんぐりと口を開けて、

「天道是か、非か、默つて持つて來な。酒だと思ふめえ、與四に說教のお茶湯だ。大和尙、然も禪坊主如意でくらはせる、と云ふ豪いのだ。」

と大な聲して、

「で、何か、あの、別嬪が裸體に成つたか。」と首を掉つて、音の調子を掠らせる。

「へい、內のお光さんのやうな、緋縮緬の、あの。」

「そんな事は何うでも可い。で、何か、質屋の使えに渡した譯かな。」

「へい、(そッくり持つといで。)然う云つて、お乳も、胸も、白薔薇の花見たやうなんです。」

と與四郎は、露出た膝小僧を坐直して、せい〳〵と胸を撫でる。

「あの、姫樣々々としたのがな。」

「だもんですから、質屋が驚いたんで。へい私も驚いたんです。」

「俺だつて、驚かい。……光坊や、お手が鳴るよ。」と、火鉢の緣を雁首でごつんと敲く。

「私だつて、驚くことよ。」

與四郎がもじ〳〵と、膝で、ずり下る傍へ、お光が來てちろりを掛ける。

「まだ、其のくらゐな事ぢやございませんです。衣服を脫ぎますとね、お爺さん、いきなりそれで以て、其處に敷いた搔卷の中へ、肩まで、すぽりと潜つたんです。私はお孃さんだと思つてましたが、あの錦木さんは奧さんなんでございませう。」

花政入道瞬をした。

「何は、お酌はよし、……臺所へ引退んな。」
「一寸、何の話？　父爺さん。」
「叱言だ。叱言を傍で聞くと耳が押立つ。」
「可厭な、太茒ぢやあるまいし。」
「其のかはり、目が附着いて睡く成る。おかぶさな。」
「知らないわ、そんな事を言ふんなら、かくやを刻して上げないから可い。」
「そらの、其處で又口が尖る。……此の、うけ口と云ふのは張出しの美人の部だが、お前の
は尖つてるんだ。」
「知らない。」と、トンと立つ。
「温習なよ……此處の合方は、一條戻橋など云ふのが可からう――で、何うしたんだな、
與四。」
「奥さんが、あの何でございます、（おゝ、寒い。）然う云つて、搔卷の中へ入つたんで、驚い
て中からむツくり、男の人が起上つたんです、へい。」
「どんな野郎だい。」
「野郎ですか、何ですか、髪の毛のもじや〳〵と長い、鼻の高い人なんです。」
「髪の毛が、もじや〳〵と長い、鼻の高い、ふん。あの女が、はてな〳〵、……ふん、いつ
れ變つた男ではある。」と、酒の呼吸に似ない、老耄れたものゝ言ひやう。
「奥さんは搔卷を引被りますし、其の人がむつくり出て、卓子臺へ、髪をぱらりと遣つて、
あの頬杖を支いたもんですから、其の質屋の若衆が吃驚して、……座敷の入口で、奥さんが上
下脱いだ衣服を……」
壁を撫で〳〵、
「あの、恁うやつて、袖壁みにしい〳〵居たんですが、長襦袢ごと引抱へて、風呂敷にも包
まないで、格子から驅出しました。……私は、木茒の籠を持つて木戸から入つて、庭で、縁側
の處から見ました。へい、質屋が露地の羽目へ打着かりさうにして遁げたんです。」

「與四公、其處だ！　な、ものは等閑に見るなよ。これ、話の河童小僧なり、別嬪が素掻巻なり、婆婆の事とは思はれねえ。不意に出會して見ろ、火がゝりの馬連に火がついたよりか、此の俺だつて目が眩はい。――處を、逃げるのに衣類一襲を持つて驅出したは豪い。講釋では臣として四方に使して君命を辱しめずと言ふのだ。然う云ふ若衆が、後年出世をする、やがて帳尻を預からうと言ふものだ。手前なぞは眞似も出來めえ。あゝ、さすがは飯倉の辻の角屋敷を張る親質の御大家だ。いゝ奉公人が居なさるの。」と、醉が廻ると、少しぶる〳〵と成る癖あの。爺樣の獨り頷く形は、娘が冠を振るのに似て居る。入道にして此の言あり、佐兵衞知己あり、で、二宮氏以て瞑すべし、と思ふと、與四郎が上目で見て、一寸うつむき、擽つたい顔をして、

「ですが、あの、何ですか、利息を持つてくのを忘れて驅出したんですつて。」

「何！　棄利の金をな、はてな。」

「七月分――（まあ助かつた。）つて、奥さんが、素肌に掻巻の襟を合はせて、くるりと起きましたんですよ。」

「あゝ、天道是か、非かい。」と横向きに成つて、入道方丈眉の白いのを、天井高く、煤を拂つて撫然とす。

「そして、あは〳〵、男の人も笑ふんです。」

「天狗笑と云ふ奴だな、可恐い、化もの屋敷だ。はて、御維新前、此の山の手邊土の惡族本御家人の屋敷には、得て然う云ふ素破抜きの町人泣かせがあつたもんよ。然うした邸には、得て今以てあかずの間と稱へるのがある。――怪もの序に、其の河童小僧は何うしたな。」

「火の氣が無いんですから、奥さんのいひつけで、あの臺所の隅に蹲込んで、七輪へ起すッて、あの、曼珠沙華の枯れた莖を焚附にして、隣寸で古新聞を燃たんです。」

「何、其の樽柿面の小僧が、臺所の隅で、七輪で……燃したとえ。いづれ、青い火が、めら〳〵とな。あゝ、以前、此の、川施餓鬼の後ぢや大川筋へ、そんな亡靈が顯はれて、筏乘が腰を拔かしたものよな……」

と兩の頰を窪ませて、緣を鎖した障子を視めて、

「まだ、留まねえ、雨は降る。愈々以て尋常ごとでねえ。其處で、手前、天麩羅蕎麥か、いつれ、蚯蚓ではある……」とまた老いたことを言ひながら、ちりの汁を、ひたりと一口。

「此とても、さて鯛でなし、鰒でなし、魴鮄だ、……天道是か非かい、與四公。」と大な聲。

「否、貝や、魴鮄ちやありません、天麩羅は蝦でございました。」

花政苦笑して、

「天道是か、非かい。分つたよ、だが、くらひも食つた、が、四ッとは驕つたよ。」

「えゝ、其の驕なんですけれど、奥さんに工面が着かないんです。木蒐でさへ牛肉を食べてるのに、——私が頰張らして居たんです——（恁う四ッ顏を揃へて、）ッて、錦木さんが……」

「四個と……待ちな、河童を入れてだ、手前も其の面の一個だな。」

「へい、一個です。」

「威張つてやがる、天道是非とも行かねえや、弱らせる。」と、今度はなめもの。

「……（一寸、金入をお出し。）奥さんが、其の男の人の袂から引張り出して見ましたつけ。（まあ、入ものばかり紅革で、中は何だい、電車賃が漸とだね。）ッて、がちやりと緣側へ投出して（小僧さん、お使賃。其のいれものだけだよ、中味はお約束した月賦だよ。）然う云つて、あの……」

と、膝頭を撫でゝ、押立尻で、丼へ手を突込む。

「待ちな〳〵、此處で木の葉になんぞなられちや、鼠が天井から煤を落す。——何うだ、……牡丹は活けたか。」

さすがは月三齋、本性違はず。

「それは、あの、手水鉢に突込みました。」

「や、俺にもせよ、あゝ、然う云ふのだ、工面がいゝと、香水を流込んで、牛の乳で行水をする……光やが、此の頃活動寫眞の口上で聞いて來た。唐天竺の女にあるとな、扣婆達多のお妾だ。」と、つまを利かして、黃膚鮪をつるり。

八

與四郎は自から號した、天麩羅四杯の腹中なれば、今夜ばかりは刺身も羹汁も閑却した顏色で、

「木菟の、その、木菟の何だッて云ふんです、牛肉に對しても、四人揃つて何にも飲食をしないでは、水を吸つてる牡丹の花にだつて極りが悪いッて、また奥さんが然う云つて、ですけれども、酒屋から煙草屋仕出屋、蕎麥屋、八方塞りで何處だつて貸さないし……

貴下は空懷だし、……奥さんが云ふんです。

髮の長い人は弱りましてね、頭を搔いて叩頭をしたんで、其から奥さんが、火の起りかけた七輪を卓子臺の上へのつけて、搔卷の袖から、白い手を出して當つて居て、いきなり袖を敲いて莞爾して、（いゝ事がある、河童の見せものを拵へて些とばかし小遣を拵へる。丁ど可い、しよぼ〳〵雨に酒を買ひに行く形に誂へよう。）（頭へ被るに借りて歸つた番傘ぢや配合が悪い。

杉葉が可からう。）と男の人が言ひますとね。其の杉葉が不可いんですつて。……

あの、彼家の竹垣の外が、すぐに、裏町の横原ッてお邸で、境に杉垣がある。いつか、餘り騷ぐから鼠の穴を塞がうと思つて奥さんが、其でも默然ぢやよくなからうと、あの、お邸の小間使が、二人でほしものを取込んでるのに、垣根越で、二葉三葉杉の葉を頂きます、と念のため斷つたら、その、何です、……お待ち遊ばせお上へ伺ひを立てますから、――然う云つて一人が驅込むと、其の一人が殘つて見張つてたんですつてさ。

すると、あの少時すると、被布の肩で風を切つて反身で、顏と眉間で見當をつけて、お邸の奥方樣がお立出で遊ばされて、垣根の處で、袖から眼鏡を出して、ぎらぎらと光らせて、上下左右を見樣いて、其の、（其のな、枯れた葉、枯れ葉。）とおつしやると、鋏を持つてついて來た小間使が、ちよきり〳〵、それを垣の上から、ぽとん〳〵、ばさり〳〵、」

「葉ッ葉の假聲は餘計だよ。」と、爺樣ばむづ〳〵痒さうに眉毛を撫でる。

「へい、此方ぢや、奥さんが默つて内へ引込むで了つたんで。窓の外が埃に成つたのが落だ

と云ふんです。一度謝絶を突かれたんだから、杉葉は不可い、何うせ引拐るんなら、斷りなしに枇杷の葉が可い。

此奴を拐るのが私の役です、へい。……錦木の屋根へ被さつて、古井戸を一ッ越して、お邸の物置へ届く大な樹で、實の生る時には町を通つても屋根越に見えるんです。いつでも取りてえな、もぎりてえな、と魂魄此の樹に留まつてら、葉だつて構はねえ。いきなり飛上つて、一束引斷つ了ひました。」

「馬鹿野郎、何うするんだ、其を。」

「河童の頭へ被せたんです。」

「かつぱの皿へ枇杷の葉を……鮪だと即死だぜ、ふん、それで……」

「跣足です、葫蘿蔔見たいな空脛を端折りましてね、貧乏徳利を振下げて、河童も可笑いんだか、ニヤリ〳〵露地を出ると、あの、黒い處へ、水仙と菊の花を彩色した柔い搔卷を素肌へきたなり、褄を取つて、錦木さんが、(舞臺飾だ。)然う云つて、前刻の牡丹の花を持つて、あとから露地口へ出かけたんです。」

「やれ〳〵、天道是か非かい。」と少し開かつた襟を合はせ、其の癖乘出す。

「河童が、前町を横ッちよに、あの、越長(酒店を云ふ。)の方へ行かうとする、と奥さんが牡丹の枝の眞中を取つて、スウと指して、(づッと一廻りして……)然う云つたもんですから、逆戻りをして、ぴしよ〳〵、ぴしよ〳〵、郵便箱の處まで。それから、又しよびたれ〳〵、ぴしよ〳〵歩出す——知つて居も薄氣味が惡いんですぜ。犬より小さい、古鼠が立つて行くゝらるにしか見えねえんで。

(ありッたけの聲をお出しな、口上を賴むわ、旨いんだらう。)錦木さんが私に云ふんで。旨いもんですぜ、へい、私あ。東西、東西、東西！」

「金切聲を出すな、馬鹿野郎、店のものは、俺が叱言最中だと思つてらい。」

「えゝ、御覽なさい箸、火吹竹ッ、晩のお支度お忙しうはござりませうなれど、御町内は御總客樣、御覽なさい箸、火吹竹ッ、河童川渡り欄干づたひ、酒屋へ三里豆腐屋へ二里、姉さ

ん、お若い、小僧は七ッだ、――何でも出たらめに喚いたんで。皆出ました。軒下やら格子前から、窓から三つも顔が覗くやら、往來が立留る。……（木戸錢木戸錢。）と錦木さんが牡丹の花で、美しい呪もんを稱へたもんですから、お立合魔法にかゝつて、……えゝ、集めに歩行いた私の手へ、ザク〳〵と入つたんで、中にや五十錢銀貨が交つたんです。」

「發奮むだ奴だな。」

「私だつて發奮みたうございました、河童より、女の太夫が、へい、」

「默つて饒舌んなよ、ふん、さて〳〵……」

「巡査が來ました、へい、丁ど交番のが通りかゝつたんですね。」

「然もあらう、天の然らしむる處だな。いづれか鬼のすみかなるべき、とあるわい。……大目玉を食つたか。」

「否、畠山さん、」

「知つてる巡査か。」

「重忠樣です。」

「怯かすない、此の野郎。」

「雨の外套の下から、洋刀を光らして、傍へも來ないで向側から、（――餘りお轉婆が過ぎはせんですかあ――）然う言つたんです。」

「はてな。」

「錦木さんが、内のお光さんのやうな柔い聲で、（はい、）……云つてね、莞爾して、羽目の方へ顔を横に向けますとね、それなり、あの、ぽくり〳〵と靴が郵便箱の角を曲つて了ひました。」

「以前、權十郎と云ふ役處だ。成程な。」

「此方より、近所の人たちが、極りが悪いかして引込んだんです。――巡査の叱言には然うして莞爾したゞけですが、私が酒屋へ勘定しに行つて歸つて來る、と、錦木さんは何うしたんだか、掻卷の天鵞絨の襟から、頸を白うさげて、うつむいて、牡丹を見て泣いて居ました。」

「何。」

「廂合の雨垂落で、雨水がちよろ〳〵と流れたのに、牡丹の色が、あの、雲切れの、白い空、薄赤い雲のやうに映ると、そればかり明るく見えて、もう暮れかゝつて、やつぱり、しよぼ〳〵降つてるんです――歸つて來た河童が、其の袖の下へ附着いて、ぢろりと顏を見ましたから、何だか露地が小川の流で、美い夫人を河童が引張つて行くやうでございましたぜ。可厭に心細くつて、寂いんで。――然うすると、チヽチヽと宿餌がすんで、糸のやうな聲で、雀の親子、且那と女房とが、おやすみ、おやすみ言つてるのが――夢見たやうに聞えるんです。」

「其處だけしをらしいや、與四、手前も片親ねえ奴だ。」

ほろりとして、横を見て、

「で、何うしたよ。」

「雀が鳴くと、然うやつてた奥さんの顏が暗く成つたんですが、家から、男の人が、づかづか出て來て、いきなり、天鵞絨の襟へ手を掛けて抱くやうにして、而して、錦木さんの手を握つて……」

「此奴は、困らせる。」

「否、ですが、其の人も泣いてるんで。」

「はて、分らねえ。」

「然うするかと思ふと、奥さんが、其の手を拂ひのけると、とんと羽目板へ掌を辷らして、跟蹌けようとしたんですが、急に、其の、威勢よく、(お河童御苦勞。)然う云つて、牡丹の枝で河童の皿をトンと敲いて、(與四公。)すぐに私を呼ぶんで、もう、ちやんと名を知つてまさ。」

「其處が魔ものよ、……な、狐、狸、天狗、をはじめ魔障のものは、直ぐに人間の名を覺える。」

「えゝ。」と、怯えた顏をする。

「うんや、驚かすんぢやねえ、何また、手前が魔ものなんぞに驚く風かい。」

「お爺さん。」

「何だよ。」

「野暮と化ものは、箱根から此方には居ませんさうですね。」と、まじりと言ふ。

「な、其のかはり、何うかすると、其の別嬪のやうなのが居るのよ。で、與四公何だと言つたよ。」

「夫人がね、(與四公、先刻の、あの—「わァかァ」最う一度私の名を呼んで御覽。)と言つたんです。えへゝ、更まつちや出ませんや。(よ。)催促をされると尙ほ不可ませんや。そのかはり、ほッほう、遣りましたぜ、えゝ、木蒐が家の奥で唸いたんです、木戸の處に眼玉がぴか〳〵。」

「大袈裟だい。」

「ですが、然う思へるほど、格子も木戸も暗いんで、まだ電燈を點けちやありません。木蒐が鳴くと夫人が、(あら、お婚さん一人ぼつち。)てッて、威勢よく羽目板を傳ふんですか、それが、あの手搜りで……、男の人が手を曳くのを、可い〳〵ッて言ひましたつけ、搔卷着に、のが悄乎するほど、容子が滅入つて、お爺さん、」

「えゝ。」

「錦木さんは盲目ですよ。」と、目をまるくして言つたのである。—

「馬鹿を言へ。」

「否、晝間は何ともないんです、日が暮れると、」と言も終らず、爺樣は胸を拍て、

「南無三寶、雀盲だな、雀盲かい。あの人が、おや〳〵、」

と、吻と溜息。急に、ぶる〳〵と頭を振つて、

「あゝ、雀盲は治る、雀盲は治るよ。」

「治るんですつて、——ですから、男の人も酒を飲みながら言つたんです。丁と醫師へ掛らなくつちや不可いッて——夫人がね、お爺さん、(然うすると、長い間何でも醫師の言ふ事を肯いて、あれをしちや成らない、恁うしてはよくない、何一つ自分勝手な我儘が出來ないから可厭だ。また言ふことを守らなけりや療治をしても役には立たなからうし。病氣を治すためにだつて、人の言ふ通りにや成りたくない。其のくらゐなら宵から寢て居ると思へば濟む。)——然う云ふんです。そして、御酒は自分で飲みますけれども、天麩羅なんざ男の膝に凭掛つて、仰

向いて養つて貰つて、あゝ、旨いつて、」

と、うつかりしたやうに口の端を撫でる、と爺樣は、への字の皺に唇を引結んで、

「あゝ、言ふ事、爲す事、魔ものゝ所爲だ。やい、與四、決して眞人間の仕業と思ふな。で、誰にも饒舌るめえぜ。しかし氣の毒だ。いづれ親がねえんだらう。な、與四、人間として附合つちやよくねえが、手前は當分、半分木菟の乘憑つてる身體だから、其の木菟の羽でよう夜分なんざ又飛歩行の使えやまた、用ぐれえは足して遣んねえ。――海は廣いや、鯨も棲めば人魚も居る、半分人間の別嬪だけに、あいつの裸體は寒さうだ、」

と手酌の、ちろり。で、時雨に寐々衣の襟を合はす、――臺所では、かくやの音。

九

「眞個の事かね、全體、槇原家の御沙汰とあつて、右の別嬪に店立を啖はせたと云ふのは。何うでがすえ、越長さん。」

越中屋長助、（錦木の宿から、時雨の夕、河童が德利を提げて行つた、越長と云ふ酒屋）は同番地の差配をして居る。――こゝへ、花政入道が一晩夜食過ぎの、中位を機嫌で、杖は支かぬが、後手を組んで、のこ〳〵もの、やつとこなと、頭で燕の巣の下を潜つて入つた、服裝は印半纏でも、表店の大隱居。

めくら縞の鯉口、淺黄木綿三巾の前掛で、目が、くしや〳〵、燐寸を擦つても嚔の出さうな顏して、稼ぐ一方、律義千萬な、越中屋の長助。若いもの小僧、五六人使ひながら、酒、醬油の量計の手加減、へい、入らつしやい、と自分で飛出す氣構で、帳場格子へ坐りもやらず、夜だと云ふのに押立尻して客を眼張つて居たのが、慌てゝ飛上つて、帳場へ、先づ、と請ずると花政が又上りはしないで、樽を引いた矢大臣、腰を極めると折込んだ胴が据つて、洞ケ峠の床几に掛つた、筒井順慶、天ケ下の日和を見る面構。唯一つぱく〳〵の唇を嘗めた處は、自分で利酒の下備へ、少くとも四割一樽と思ふと、然うでない。

言はれた事は唐突だつたが、返事に差支へる事ではなかつた。低い聲の、爽ならぬもの言ひ

で、

「えゝ、其の店だて、と申すと穏でございませんがな、御邸の方に、少々餘儀ない事情がございますので、」

「いづれさ、事情がなくては成らねえ、店賃の滯りなんぞでがせう。」と云ふ、爺さんの頸には財布の紐が緩やかに掛つて居た。

「最も、店賃の處もございます、が、それは、お邸様で一時お立てかへに成つても可、其上に、引越料と云ふやうなものも、相當に出して遣らう、と恁うまで仰有るんでございましてな、へい。」

「確か、此の邊の家作は、こりや槙原のではないのでがしたね、……越長さんは御差配だ。」

「へい、届きませんが、差配で。家作は持主が違ひます、が、地所はすべて御邸様のもの。と申したやうな譯で。」

「然れば、地主にしろ、別な家作ぬしの方へ、借家人の店賃を立替へて、引越料まで出さうと言ふ、これがそれ、他のお大名なら、陽氣の加減で、道樂になさるめえものでもねえがね。町内に火事がありや、消防夫が樋を伏せて一煽りお迎へ申さうと云ふ邸でがさ、越長さんの前だがね。それが店賃、引越料とまで氣張つたのは、何う云ふもんでがすえ。」

「其がね、御隠居さん、容易なりません事情なので、」

「はてな。」

「御邸様は唯今の御住居は、彼は確か一昨年あたり御新築に成りましたので、根岸には舊御殿今では御控邸でございますが、其の、貴老、御殿から御前と御一所に、否、もし、御前同様にお引移りに成りました、御先祖代々、中興の城の御天守にお据申上げたと云ふ、お人形様が御一體。」

と謹んで、まじりと言ふ。と隠居が引摑みさうに大な握拳を前へ突出し、肱を張つて、

「はあ、木偶が一個だ。」

越中屋長助は苦い顔して、

「否もし、槇原様御代々の靈魂とも申すほどな、大切な御人形で、白菊様と申ます。」

「はゝあ、えゝ白菊……名告を上げた處では、こりや、雌だね。」

「飛でもない、へゝゝ、御隱居、御串戯ばかり。雌雄などゝ、御勿體も無い事で。――えゝ、と申しますのが、至つての御秘密でございましてな。御邸の御家來衆はじめ、なか〳〵御姿は拜まれません。從つて、女體男體とも存じたものはないのださうで、と申しますのが、御邸では御前様、若殿様、其の他、家令家扶御男子の方は、其のお人形様を唯今お話しいたしましたつけ、「雲井様。」と申されますが、奥方様、姫様、お小間使方、すべてお女中は、「自菊様。々々。」とおつしやる掟で、同じ御人形に、申し方が兩様でございますくらゐで、御本體は分りません。何しろ、豐臣、德川家、足利、そんなものではございません。源平藤橘と申す、あの、藤原時代からの御姿だと風説をします、御奥の別殿、お人拂ひで御据ゑ申してありますさうで。

但、御前立、御齋眉の若衆人形、此は人も皆知つてゝございます。それ以ても、お出入ぐらゐの町人には拜めませんが、御客、御家衆、誰方も御承知で。えゝ、「霧之助殿」と申す、前髪立の、眉のきりゝとした、目の清しやかな美しい、それは凛々しい。黑羽二重の紋着萠黄瀧縞の袴で、脇差、と申すのが、此が趣の變ました事は、黄金づくりの小太刀ださうでございましてな。」

「はて……此奴は些と價値さうだね。」

入道、上胡座の片脛を落して、腕を拱いて、

「御勿體も無いことばかり、へゝ。此の御若衆とてもでございます。お小間使如きが手も觸る次第には相成りません、夏冬、時々のお召替も、御本尊同様に、御邸の、何でも總領のお姫様がお手づから、召せ脱がせをおさせ申す定ださうで、御代々。へい、最も姫様が、おあんなさなければ、奥方様のおかゝり、此は申すまでもございません。

で、此がためには、海を越して、貴方様、北海道の王と、申す、大鑛山の持ぬしへ御縁着でおいでなさいます、御姫様が、雛、菊の、節句ごとには、故と遙々お立戻りで以て、お裝束をお更めに成りますくらゐ。其の砌は、お姫様、さげ髪白無垢、緋のお下襲ね、と云ふ清らかな

お美しい姿で、別室に矢張り、お人拂ひの上ださうでございます。――夏冬のお召替、御代々一度でも此か等閑に成りませうなら、忽ち、……え〻、「白菊様」御機嫌が損じて、御邸には、火難、盗難、劍難、水難、なか〳〵病煩ひ處では納まりが附きませぬさうで、事も容易なりませんやうな次第で、……既に先頃、此の九月にも、姫様が右のお立戻りで、其のお儀式が相濟みましたばかりなのでございましてな。」

花政入道、天井むきに目を瞑つて、

「入費は――婚持でがすね。」

「はあ、」と、唐突で些と解しかねる。

「否さ、槇原の事だ。總領娘が北海道から往復の入費などはさ、いづれ婚の方で負背でがせうね。」

「はあ、其邊は何とも手前心得ませぬが、何しろ、事も容易なりませぬ次第で、最も御縁組以前から、此の儀は、堅い御契約と承つて居りますよ、へい。」

一先祖の靈魂だと言ふんだ。大名の先祖はいづれ木偶ではがあせんよ……家の掟だ、それだけは感心だね。最もさ、火難、盗難、水難、劍難で怯かさねえぢや、白無垢を引いても疊が摺れるなどと言ひ兼ねめえがね、其は可うがさ。いや、お話は成程と思ふがね、越長さん。それが何だつて又別嬪の店だてにかゝり合があるんでがすえ。」

「其處でございますよ、御隱居、御總領の姫様が御婚禮の砌り、然うした御約束がございますと同然に、御邸様で、此の地所をお貸下げに成ります時、借ぬしへ御内意には、建てた家作の中へは、一人欠たりとも盲人を住せてくれるなでございます。」

「盲目を……はてな、」

と前屈みに、腕組のまゝ頭を乘出し、

「一人たりとも……最も、按摩の欠と言ふのは、ついぞ無えがね、はゝはゝ。」

越長も苦笑した。

「へゝゝ、と申すうちにも、男の按摩は構ひませんので、瞽女が不可ません、其の白菊様が

昔から金倫際、女の旨日をお嫌ひ遊ばすのださうでございましてな。」

「大層な我儘だね、と云ふが、色身な瞽女どのは私だつてあやまりまさ。朝顔日記宿屋の段さね、大井河の縁で、天を仰いでハツタと來る、と牡蠣の剝身をどろりだよ、お前さん、聞いても恐れる。が、さて、何うしたと言ふんでがす。」

「否、御邸様ではね。御隠居、何う云ふものでございますかね、引續き、變な、御氣色の悪い事だらけ。彼處にトーマスと云ふ、難有い事には、内閣の大臣方から下置かれました處の、其の……」

「知つてまさ、南瓜、うんや、南瓜ぢやねえ南瓜だ、頓馬だね、居まはりで背高のつぽの魚屋の定と對な奴だね。」

店の若衆が哄と笑つた。

越中屋の長助くしやくしやの目を尙ほ皺めて、奴等を睨んで、

「御隠居、彼岸の中日の夜中、一時頃で、御門を敲いた電信配達が、キャツと言つて打倒れましたので、門番の爺やが、吃驚して出て見ますと言ふと、右の大黒犬が、土塀の屋根へ乘つかつて、流星を見ながら欠伸をして居ましたさうで。犬が其の屋根に上りますと家の礎がぐらつくと申すくらゐ、よくない兆と言ふ中に、鼠が井戸へ落ちて釣瓶で上りますし、生りがよりの柿が、ぽたぽたと蔕を離れて落ちます。時ならぬに蛞蝓が湧いて御床の間の柱を這ふ。御臺所の屋根へ草が生へて、大な峨が飛んだり。お求めの魚の目玉が抜けて居て、お玄關の廂で烏が啼いたり。それはそれは可厭な可忌い事ばかり。前例も度々の事、御邸の御記錄にも殘つて居ります儀で、皆是れ雲井様御不興のお祟りでございますが、何う檢べても、お上通り、御家來衆に、手ぬかり、落度と云ふが、嘗てございません。もしや、と八方を搜しますと、何と御隠居。地面内にも、何と、直き其の井戸端の枇杷の樹の蔭に、錦木でございますな、右の、奥さんでございますか、お嬢さんか、お師匠さん、姉さん何とも意體の知れない、貴老のおつしやる別嬪が住んで居ります。聞訂しまするとと、不思議に、其の、彼岸の入頃から煩ひついたとか申す事で、」

扨こそ知んぬ、和歌子が雑司ヶ谷の途中から、河童に背負はせて歸つた曼珠沙華を、人の問ふのに答へて、冥途を照らす松明だ、と言つた、あはれ、其の心の裡。

十

頸へ財布を掛けて、兀頭で押して來たほどだから花政が納まらない。

「越長さん、趣意は解めたがね、お言の中でがすが、雀盲はこれ盲目とは違うよ。たとひ瞽女にもしろ、其の廉を以て店立を食はせるとは何事でがすえ。然も直接もちの貸家ぢやねえ、言はゞ隣同士、背中合はせの松飾ぢやねえ、槇雜棒と錦木だ。」

と、唇をべろんと舐めて、

「盲目が店立に成るやうぢや、啞だと遠島だ。聾は百叩きで江戸お構。これ、躄や、手棒は死罪だね。串戯ぢやねえ。木菟、梟は晝間礫、鳶烏は夜中獄門だ。途方もねえ。人形が祟るのは筋が違うね、別嬪の所爲ぢやがあせん。私が思ふにや、あの邸だ。食物が悪いためた。白菊、何だッけ、其の霧之助人形を飼置くのに、稗や粟ばかりなんだらう。」

若衆の中で、誰やらヒヤ〳〵と言ふ。……又哄と笑つたのである。

花政入道蒿に掛つて、

「御託はねえのだ。其の人形殿も、祟るなら、悪く遠廻しに手前の邸を突かねえで、いきなり別嬪の寢床へでも、湯の中へでも踏込めさ。直か祟りに祟るか可、槇原の方も又無法千萬な何のかゝり合もねえ裏隣家を越させようなぞと血迷はねえで、さつさと自分の方で引越して行くが可うがせう……ねえ、先づ、ものゝ道理が。――其處で何かい、内の木菟に聞いたが、お前さん、其の店だての御上使にお出向きなすつたか、まじ〳〵と。」

「えゝ、まじ〳〵出向きますと、へゝゝゝ。」

今の（まじ〳〵）と味方の若衆の裏切に、人の好い長助も、聊か肝を煮したらしい、が、氣の弱い親仁だから切つて掛るのも這身で行く。……

「驚いた事には、床の間正面の壁に、花籠と云ふ處を、木菟籠は變なわけで。おまけに其の

何時細工をした事やら、處々、白紛やけなどのございますな、緋縮緬の、外套やうのものを羽織らせてございます、頭にもな、耳を出して顔卷を。右の木蒐が貴老、途方もない。」

と言つたのは、此の頃、花政の與四郎が、同じく、和歌子の仕着と稱する、右同斷の切れ外套めかして翩翻として町から辻を自轉車で驅廻つて、時々三越あたりの使小僧の蒲黄な奴と擦違つて、目を剝けば、舌を出す。鳥だか獸だか奇怪至極で、風立つた日なぞは、物騒にも炎の飛行するが如き亂行を、散て隱居の禁抑しないのを諷したのである。

驚くものか、花政はけろりとして、

「ちくりと來たね、内の與四郎も右ボチ〳〵だと言ふんでがせう、あれは廣告でがさ、花屋政右衛門、資本入らずで別嬪の母衣を使ふ、井伊の赤備と云ふ軍略さね、――悪く見ると、しかし、」

と、聊か聲を密めて、

「別嬪の其の、穩ならぬ比羅にも成るがね。花に遊女草があれば、草にも三味線草でさ。大海は廣いや、鯨も住めば、人魚も居る。腰から下は人間に非ずでも、時雨は裸體は寒からうと――こゝが人情ぢやがあせんかい。別して雀言と言へば尙ほ不便だ、杖を持つなら杖の尖へ菊でも結えて遣りてえや。」

若衆達を眴して、

「何は、河童が酒を買ひに來るとね、來ますかい。」

「えゝ、今しがたも來ましたよ。」

また一人が、

「御隱居さんと擦違ひなくらゐなもんでした。」

「はゝあ、成ほど郵便箱のすぐ手前で、をかしな犬が、ちん〳〵をして歩行くと思つたが、彼奴かね、私あ目が悪いよ、」

と瞼を擦つて、

「いづれも親のねえ所爲だ。……河童を餌ふのも、木蒐に緋の外套を被せるのも、可かね。

我儘不辱とも言へば言ふのだが、これ、御互、銘々の内に、玩弄の般若が無くもなし、狸の掛地を掛けずとも限らねえ。悟ればそれまでゞがさ、はて、大海は廣いや、般若も住めば狸も居る。」

「海に狸御隠居様違ひました。」と小僧が黄色な聲を出す。

「はう、違つたか、いや、年紀にはかなはねえ、大分嘘舌つた。」

花政は口を撫でゝ、

「處で要談だがね、何は措いて雑と先づ、店立ての御使者に、お前さんが出向いたわけだ。」

「決して其の、何でございますよ、差配の權柄づくで何う恁うと云ふのではございませんので、近藤友英殿、えゝ、御邸のな、昔なら千石取と申す御家老、唯今はお執事でございますな、其の方がお出向きに成りまして、手前はな、唯もう差配と云ふので、顔だけを、それとても恭しく子爵様のお名札の据りました、白木の臺の御進物を持ちまして、」

爺様は、しやつきりと肩を張つて、膝に手を掛け、

「紅白の水引、大奉書、中味は半紙九枚でがすね」

「否、角の荒物屋でお求めに成りまして、手前存じて居ります、……上つ方では恁う云ふ時のお儀式と見えまして、鹿角菜が七枚。」

「鹿角菜が七枚。」と忘れもしない、貴夫人が牡丹の値に驚いた時のやうな異聲を放つて、

「あゝ、天道、是か非かい。」

若衆が三たび哄と笑つて、今度は拍手した奴がある。

「九は病、五七の雨だ、が鹿角菜だけに天氣でがせう。」

「然やうでございますかな。」

とまじりとして居る。……町内に華族があれば、自分お膝元の町人と云ふ心得、成程此の了見なればこそ樽拾ひから此までに仕上げた、以て龜鑑とすべきである。

花政から〳〵と笑つて、

「はゝゝゝ、や、話は早いが可い、處で別嬪の挨拶は何う云ふのだね。」

和歌子は意地では引越さない、が、江戸に下町がないやうで口惜いから、或は家を明けても可い、けれども氣に入つた先の見つかるまで、と云ふ、存じのほか穩かな、併し取留りのない返事をしたのである……と云ふ——

「理屈は除けてだ、ね、越長さん、生れは御邸の在方にもせい、最う此れ十何年、お祭禮の御神酒所ぢや顔を並べる連中だ。先方に白菊、霧之助がついて居りや、此方には神功皇后樣、武内の山車がついて、獅子が背後に眼張つてござる。可かね、寄合で將棊をさせば、口惜いけれど　香車一枚お前さんの方が强いや、合はねえ。」

「へへへ。」と、嬉しさうに、若衆を睨廻はして莞爾する。

「此處だ、越長さん、ね、其の强いのが、大名華族の味方をして、風儀が惡いが、我儘が、細りした女一人、然も雀盲のあはれなのを居所に迷はせると云ふ……成角で歩を取つて頂く法があるものか、邸は邸次第として、兎に角、御差配は、すつぱりと手を引きなせえ。店のものや、嫁、娘の手前、表向とは行かねえが、……店賃なんざ心得て話をつけよう。……無盡に當つて、內證の金子が、切餅五ツ。霜月の中ばと云ふのに、此の景氣は見せてえやうだ。」と三德の如き手つきで、がッしりと胸を壓へた。

一も二もない、越中屋の長助、畏つてお辭儀をする。……綺麗に酒を誂へた。

「難有う存じ……」

「お皈んなさ——」と、口々なり。

「はい、お喧しう、どつこいな。」

皈りがけに、さて、此の露地だ。

「あゝ、突當りに居るのが、雀盲だと思へば夜も餘計に眞暗だな。——喃。若え時に、俺も何と、總領娘を品川の苦界に沈めた。苦勞爲死に死だ時、何を佛に拗ねたやら、墓には曼珠沙華ばかり手向けてくれ、手前は目蓮のいろでも持つて惚氣だかも知らねえが、親は骨身に應へるわい。山の手一番の花政が、娘が遺言のすきな花を思ふやうに見せられねえのも、報と因果だ。」

爺樣は獨りほろりとした。

「何か、此處のも、秋の彼岸に、家中、曼珠沙華を活けたとな、――暗いにつけて、狐火のやうに、ちら〳〵と、あゝ、目前にちらつく。其ン中に、白い衣服が、娘の幽靈そつくりだ。」

丼の輪珠數を手首へ、

「南無大師遍照金剛。――若死するなよ、鶴龜。」

とて、二ッばかり胸を叩いて、

「長いきをさつせえよ。やれ〳〵、子ゆゑの暗夜には、與一兵衞だ。懷中に無盡の金、あゝ我ながら意氣地はねえ。しや、別嬪を露地において、小涕とは何事だい。南無大師遍照金剛。」

禿頭へ、すぽりと[illegible]被り、寒さうに、ひよこ〳〵と行掛つたのは辻である。腰を伸すと角邸磨いた甍が星に冴えて、夜目には遠く城の如し。

「槇原の邸だぜ、はてな、地代を慾張つて庭は狹し、然して樹林の圍も見えぬ。根岸の御殿は知らねえが、新築だと云ふ見掛け普請が、奥深く棟が高え。廻はした土塀も砦の構へだ。……霜が他家並より早いのか、鎧つたやうに棟瓦が暗に光る、――大名の威光かな。……奥と言へば冬牡丹に反つた奴――はて、不思議だぜ。別室に秘めた、雲井、白菊樣とか、霧之助殿――と言つたな。代々總領の姫樣が、緋縮緬の下襲ね、白無垢の下髮……解せたわ、其所爲だ。」

途端である。しゆつと地を裂く音がして、黑い奴が路を切る、と、わッと叫んで、追はれて遁げたは、與四郎小僧。呀、頭から鹽かと思へば、郵便箱の赤い上へ、ひよい、と乘つた。はずみに發と煽らせたは緋鹿子のお仕被外套、印度の石地藏と云ふ體で、日にやけた手を拍いて、

「此處までおいで、此處までおいで。」

腹なりに、のし掛つて、鼻嵐を吹きながら、前脚をもがノ〳〵と暗を引搔のは勿論トーマス。

早や寢た、萬年堂の溝板を、ひた〳〵ひた〳〵と赤面の侏儒、横歩行して出來たる。

十一

「何うも何とも言へませんね、滑々として柔かくつて、堪らなく可いですな、不思議な手觸

りですよ。」

「衣觸りだとお言ひ。」

と言つた。和歌子は、六疊の暗の中に、燈も置かず、卓子臺に凭掛つて、按摩に肩を揉ませながら、

「人聞きが悪い、身にでも觸つて居るやうぢやないか。」

「えへ〳〵、御新姐さん……え〳〵、お嬢さん、貴女のお身體あ、僕はね、此の通りだと思ふですよ、羽二重と云ふのですかね。」

然矣白羽二重、猶太の女の寢衣に似て、そして袖の長いのである。寒いから、下に襲ねたのは、着古しだが、色の白さに灰汁を洗つて、雪に、もみぢの散殘る緋鹿子の長襦袢、兩袖を引切つたのは、一つは與四郎の母衣に成り、一つは木蒐の外套に成つて、現に床の間の壁の正面に、眞向きの、双の眼が輝く。時に、さら〳〵さら〳〵と烏には似ない羽の音は、翼が外套を煽るのである。

和歌子は、あの黑地に菊と水仙の友染の掻卷の、裏の朱鷺を、腰に辷らして膝に敷いた。按摩は紺絣の衣服に同じ羽織、白い紐を大きく結むだ、色の生白い、十六七の、頭の先の尖つた小僧で、戸外を流したのを呼込むだものである。

聲がはりのした奴が、舐めるが如き辯舌で、

「隨分何です、僕はね、澤山のです——數限りなくと言ひたいですね、女を何です、手に掛けましたけれどもね。」

「稼業が繁昌で結構さ。」

「えへ〳〵、稼業ぢやないです、別の方面ですよ。ひひひ、勿論、あれです、稼業の方だつてね、遣つても遣らなくつても、此で經濟を何う恁うと云ふんぢやありませんや事實。……ですからして、此でね、療治に呼ばれて、客が男だと斷つ了ひまさ、僕の療治は男には利きやしねえ。」と唐ぬけに矢藏なものいひ。

「客が怒るだらうね。」と、煙草を喫まうとして頸を垂れつゝ、揉む手に委せた肩つきの品の

よさ。

火鉢の火の影、按摩は、糸の如く盲ひた眦を、眉ごと下げて、ニヤりとして、

「でも、男の客にや、又それだけの用があるんです、利かねえたッて串戯だと思ふから、確乎遣れなんて言やあがる。そんなのは背中へ廻つて、へへのゝもへいじを指の尖でのたくらして居りや可いんで。其のうちに、女の話をして聞かせて遣るんだ。僕の知つてる――數澤山だし、種類は多いし、大概の男が、それからく〳〵ッて、僕の指の尖で、獨樂見たやうに、ぐるぐると身體を廻さあ。僕の經歴を話すとだね、唐人髷から、結綿ね、文金、廂髪、女優髷、大一番の丸髷、何でもだ、其の中からね、孰でも好さゝうなのを撰取つて、また世話をして遣るですよ、施しの氣だ、自分の持ものだつて何だつて、功徳に成るし、此方は珍らしくもない、ざらなんだから。施した上で禮は貰へる……家からも祝儀は出るし……だから小遣はあり餘つて居るんだから、しろものに依つちや、此方からも注込むのがある。あゝ、手を動かすと懐中が突いて不可え。」

と、紐をはづして頸から取つた財布をぐる〳〵と卷いて、重さうに、亂れた搔卷の裙へ手搜りで置いて、其の上へ、めりやすの食み出した膝を乗せた。そして、首を出して、ひたりと、日衣の背に胸をつけて覆はれかゝつて、煙草の煙に鼻を寄せるやうにして、フンと嗅いで、

「さあ、横にお成んなさい。」

唯、衣擦の音がして、言はるゝまゝに、自由に成るらしく横に成つて、うしろ向きに搔卷をすつと裙へ、……引いて取られた壓に成つた按摩は、疊へ落ちて、も一つ財布の音がした。

「ひゝゝ、御新姐さん、お孃……姉さんが可いや、色氣があつて、年紀は幾才ですえ、」

「……」

「えひゝゝ、當てゝ見ようか。そりや場數を歴てますからね、特に女にはですな。うまれ月まで違えねえくらゐなもんだ。恁うさすつて見た、背格合でね。内にだつて、髪の毛から、足のおや指の尖まで、僕の手の中に轉がつてる女の九人と八人は居るんだから。――だがね、今も言つた通りだよ、姉さんのやうな、ひゝゝ、衣觸りかい、ひゝゝ、こんなのは始めてだから

違つたら、御勘辨。密豆を三杯奢らい。……四かね、五かね。堪らねえ處だい。」

「按摩。」

「……」

「ほッほう。」と木蒐が床の間で。火鉢のあかりは谿間の一つ家、深山幽かな寂しい聲。

「按摩。」

「え、今のは。」

「木蒐が啼くんだよ。——山奥かも知れないよ、谷底だか、塚穴だか、宮だか、社だか分らないよ——按摩。」

「按摩は悪だね、君、君だから僕は敢て怒りやしないが、若師匠、小さな先生と言つてくれ給へ。これでもね中學の一年は學つたんだ。制帽でね、靴で、其ン時にやボンと草場へ轉がりましたよ、海老茶を穿いた起上り小法師だ。ひゝゝ、たあいのないんもですぜ。」

「一寸、」

「何だね。」

「此處を何處だと思ふんだよ。」

「霞町の錦木さ、憚りながら知つてるよ。麻布ばかりぢやありませんや、淺草の姉さんだつて知つてるよ。」

「淺草の姉さんだつて？」

「知つてるでせう、公園ぢや……緋服紗のお染と云つてね、芝居のお染をお茶の湯仕立だ。抱への八人も置いて居る大籠でございますのさ。僕は眞個の姉弟だけれど、柄がお染に肖ると云つてね、久松々々久松さあん、編上の靴で學校通ひが、ひひゝ、女の思ひで、風眼で見えなく成つた。が、其のかはり心は明かに光つてら。姉さんの鼻筋の通つてる、髪の艶まで、よく見える。——雀盲だつて？　可哀相だね、寂い顔をしてますねえ。」

「木蒐が鳴く山家だもの、按摩。」

「まだ、言つてら。怒るぜ、僕は。」

「勝手におし。」

「可いかい、ひゝゝ、ひゝゝ、然う言はれると、君だけに怒れない。さあ、此方を向いておくんなさい。」

黒髪の、黒髪の、はらりと枕にかゝる音、留南奇の香が颯と散る。木蒐の聲きこゆれば、桂が薫る氣勢である。

久松の手が、ト羽二重の袖に淀んだ。

「うまからう、姉さん、稼業は稼業で、療治の方も本筋さ。」

「すぢだか、はんぺんだか知らないが、淺草から、こんな處まで、大變なあぶれぢやないか。」

「串戯言つてら。そんな、そんな金錢に不自由して稼ぐやうな御人體か、柄を見て貰えてえ。雀盲だから、夜で見えまい。都合で晝間出直すからね。――此の半年ばかし、淺草も鼻についたから、十番に居る二番目の姉の許へ來てるんだ。矢張りね、四五人居るがね、土地だけに場違だぜ。だが、鯛鮪も食ひ飽きた口にや、秋刀魚のあとを丸八の黄袋で齒を磨くのも悪くねえよ……」

「お前、口ほどにもないぢや無いか、可哀相に奉公人を苛めるなんぞ、」

「馬鹿な事を、」

膝を、ばた〳〵と疊の地たゞら。

「御人體が見せたいや。一寸でも客が居ねえと、彼方からも久松さん、此方からも久松さん身體が續かねえくらゐなもんだ。淺草も、十番も、其の味に變りはねえよ。空腹な野郎も野郎だけれどね、女と云ふものは、また何うしてあゝだらう。雨のしよぼ〳〵降る、此の時雨時なんぞ、夜中、十二時過ぎと云ふのにだね、材木屋の辻や、石屋の角に、濡れしよびれて立つてる婦を見ると、戸惑ひをした貴夫人や、ひとりものゝ救世軍なんか、悲慘だの殘酷だの、何かね、社會問題だなんと言ふだらうがね、へむ、主人は頻つて早く寢かせようとするけれど、奉公人各自が男がなくつちや寂いんだよ。……岡釣が川端で日を暮すのも同じさ。どんな雜魚が

釣れるだらう、間違つて龍宮から勘當された鯉でも引掛りやあしないかつて腹ですぜ。樂なものだとね。汁粉が三杯、蕎麥が二杯か。おでんの立食をすればつて、鮒も鯰も遁がしはしません。それでも溢れると、あけ方の三時四時でも、久松さん後生だと來ら——續きませんとも、實際。何うして婦はあゝだらう、商賣人ばかりぢやないんですぜ。呼込まれた療治の對手が、何だつて、御覽じろ、一晩旦那が留主の處か、半日主人人さへ居なけりや、へむ。」

和歌子の肩が靜かに搖れて、

「按摩のかなしさ、前世の果報が拙くつて、盲目に成つたくらゐだもの。然う云ふのはね、百姓や、田舍の女にばかり出會すからだ。おさんどんでも可いからね、お前、信心をして、一度江戸兒と思ふ女に、口だけも聞いて御覽。」

「へむ、では何かい、姉さんは。」

「あゝ、お姫樣は柳橋だよ。當、霞町は御別莊さ。」

「燈も點かねえ御別莊だ。僕が、今夜來たてにも、魚屋かね、牛乳屋かね、大分催促が來ましたぜ。眞暗だから歸つたがね。……何も、貧惜みを言ふにや當りません、男氣は無し、寒さうだ。こんな暖るものは何うですな。」

と件の財布を片手で摺らして、唯、摑んだが、和歌子の懷中へ紐ぐろみ突込むと、はずみに辷つた白羽二重、其のまゝ、袖を取つて、ぐいと引く。衣紋が飜つて、唇と、煙草と、齊しく颯と紅い。

「ほゝゝ、ふゝゝゝゝ。」笑の花も紅である。

木蒐が鳴いたと思へ、あの爛々たる眼を切つて、鬥然と白く輝く稻妻。和歌子の頰に光を流して、寢着の咽喉の氷の短刀、按摩が右に逆手である。

「阿魔、生意氣だい。」

語氣も血相も黑く代つて、

「冷りとしたらう、氷ぢやねえ、肝にこてえて口も利けめえ。さあ、きやつとでも言つて見ろ。長屋中が飛出す前に、一抉りだ。これ、俺ア按摩だ、盲目だぞ。汝の懷中にや何がある、

俺の財布だ。やい、大岡越前のお白洲でも此の言わけは立派に立つのだ。……ひゝゝ、」

と笑つた、此の小按摩は、あの手で成らねば、此を用うる、久松市とて彼等に知られた女たらしの低能兒であつた。

寐よと云ふ麻布聯隊の喇叭が留む。

「ふゝん。」とばかりで、寂然として、掻卷の袖も冷い。

吃驚して氣絶したのであらう、と思つた。久松市が撫でゝ見るつもりの手に應へたのは、短刀に、ものゝ觸つたので。呀、威の切れもの、と引かうとすると、むかうへ引くか動かない。怪訝に思つて、聊か忙いたらしく片手を胸へ掛けて、ぐい、と引起すと、眞綿より柔かに、なよ〳〵と成つて、起きしなに、トンと肩で凭れかゝると、しかしながら戀の重荷に、久松市は背後でくしやんと腰を支いた。が、手で探つて驚いた。指が觸れてビクリとした。和歌子の手が、其の短刀の刄を引攫んで居たのである。

「馬、馬、馬鹿、指が落ちるぜえ。」と、慌てゝ言ふ。

爾時、片手を火箸に掛けて、火をあらけた、顏の色は、神々しいまで白く透つて、

「ふゝん。」と片靨した、それさへ白い。

「えゝ、狂人。」

「小僧、手前たちの持つ威しの小道具は、お極りで刄びきなんだ。——戸惑ひをしねえで、二十五座の座頭に出ねえな。」

十二

面疱の引込んだ惡黨だと、最う此で見切りを着けたであらう。が、二才だけに、盲目だけに今ので張合もなく短刀を落しながら、もう一息。

「女の癖によ、汝！」

「何をする。」

「きやッ。」ポキリと音して、小袖の霞を越した手は、指を二本、逆に取られたのが、節を離

れて挫折れたのであつた。痛手に堪えず、叫ぶとゝもに久松市は、仰向けに轉がつた。

「あ、痛々々々々。」

足を悶へ、胴を揉み、ばた〳〵と煽つたのが、どしん、どしんと蹴はじめた。

「畜生、あ痛々々々々。――畜生。」

が、心も眩んで、足に掛けようとする女の居所を捜り得ないで、徒らに空を蹴て居るうち、和歌子は、輕く一つ手を拂つたなり、火鉢に掌を翳して居たつけ。按摩が掙り、悶いて、痛さの發奮に、刎起きると、猫がする如く疊を搖つて、捜り手に摑み着かうとするので、

「ちよッ」舌打して、すッと立つた。立ちさまに、發と電燈を。忽ち明るく成つたので、然らぬだに顚倒し腦亂した久松市は、居處も立處も方角を失つて、徒に足で、たゞらを踏んで、片手搖りに壁の上を摺廻る。

「畜生、畜生、食殺す。」

和歌子は床わきの、波の剝げた、千鳥の亂れた襖に身を寄せ、俯向いて凝と窺ふ、……半殺しに手に掛けた、蛇の頭と、蜥蜴の尻尾の、裾近く、ぴち〳〵刎廻るのは、餘り心持の可いものではないかして、和歌子は始めて眉を顰めた。

唯不意な電燈と此の騒動に籠の木菟、宛然、着た蓑の燃ゆるが如く、紅い外套を煽つてひよん〳〵飛ぶ。――傍の壁に寄掛けた、白羽の矢が七筋と一張の弓がある。破魔弓、半弓の類で此の怪鳥を威服し、かの按摩を抑制すべき武器ではない。手遊びの楊弓で、和歌子が晝の徒然を慰む……近頃は河童の矢取りが出來たので、一層壯に杉坦の的を射る……其の的は敢て仔細ないが、ともすると緣の日向に山茶花の絞が咲いた片膝立ての姿にして、矢を空ざまに、木戸の糸瓜を狙つて、よッ曳いて、音がポンと中る。又鍛錬なものだが、何となく皮肉らしく、近所の男どもが此には弱つた。

「うー、うーむ、」――按摩は、紺絨の黒い腹を仰向けにして、甲蟲の裏返つた如く餘ッ程な疼痛に手足を縮めて、引息に聲が途絶える。

和歌子は襖に白衣で立つて、恁う窺ひながら、奴が目を眩したらしいのを試すのに、あの財

布を握つて、ドンと扱けたのが、土性骨に當つたので、忽ちも一ッ激しく呻吟ると、彈出されたやうにむつくと起きて、最後の復仇、で、どし〳〵どん、どたん、ばたん。

門、木戸、水口の戸の開く響、合壁の人々出合ふ途端に、露地を風の如く吹込むものあり。

「與四公かい。」

「奥さん、――え丶何だ、此の、キチ〳〵ばつた。」

「畜生、畜生、畜生。」

「與四公、つまみ出しておくれ、其の虫を。」

和歌子は、それでも雀盲のしほらしさに、搔探る手つきをして、

「刄ものを持つてるだらう。切れはしないがね、突かれると危いよ、怪我をおしでない。」

「へい、何だ、生意氣な蠟燭按摩、花政ン許の與四郎を知らねえか。」

暴れ廻る手を壓へて、襟首を取ると、づる〳〵と引摺出す。

「畜生、交番へ告訴をして遣る、縛られるな、女郎、覺えて居れ。」

「一昨日來い。」

で、杖を取つて放出すと、露地を、ひよろついて行く久松市の出端を切つた、挾る杖に脛を取られて、前のめりに、つんのめつて眞うつむけ。

「交番へ告訴をして遣る、交番へ告訴をして遣る。――縛らせて遣る、縛らせて遣る。」

餘りの事に泣喋舌りに喋舌つて、色按摩鼻血をだら〳〵。

「白痴め、汝の方が縛られよう。」

仔細を聞いて、合壁は靜まつた。

「生意氣ッちやありやしない。」

對手を、蛆虫と思ふほど、魔の御前の疳癪は、然うして後に尙ほ亢奮つた。のみならず、いきもの丶中にも、同じ人間の指を二本折挫いて盲の上の不具ものにした心は、靜かに安らかではないらしい。あの、懷に手を挿され、咽喉に短刀を擬せられた時の花やかな微笑は、蓋し、青く黑かるべき憤に、色を濃く染めたのであつた。

「見くびられた。」

蛆虫に侮られたのは、鬼に虐げられたより、此の氣象の女に一層口惜い。歌和子は今に成つて、却つて、眦を上げつゝ、河童と――（此は花政の小僧が、勢よく奮んで飛込んだために木戸に忘れて入つた影法師のやうに、あの時一足をくれてちよろりと歸つた。）――與四郎とに、ものを食べさせながら、幾度も、乳房の上を、羽二重越に拂ふ眞似しては、是に肩を震はしては、指環を弄ぶやうに、右の二本の指を、熟と左の手に握りしめ握りしめた。

「生意氣な、」

「鍋燒饂飩――」と木戸に居る。

折からの按摩の笛は、久松市が指の痛さに泣號んで居るかに聞こえる。

和歌子は、ふと顔を上げて寂しく笑つた。河童と與四が其の鍋燒を打ち食ふ音は、三人が喋舌るより賑かである。

「生意氣ッちやあない。」

むゝ、生意氣といへば疳癪序に、然うだ、裏の邸槇原の靈魂とか言ふ人形の事である。何白菊だ、霧之助だ。盲目の婦を忌嫌つて、邸へ悪兆を顯はすと紋着袴の使者を寄越した、生意氣な。總領の娘でなければ、主人の子爵でも顔は見せぬ……生意氣な！……よし、おもしろい面を見よう。人形の首實檢に、丁ど可い。此方からも差遣はすべき誂への、上下つけた御上使一羽。

さて途中まで差添への役目だが、首尾よく勤まるか何うかを與四郎に謀ると、小僧の返答が奇拔であつた。

「私あね、おまけに屋根屋の悴ですよ。」

直ぐに用意。で、小僧に木蒐籠を持出させ、河童に蠟燭を點させる。と點す河童の赤面も、棒げる小僧の黄色な額も、加ふるに、外套を被た木蒐も、白衣姿の和歌子の前に、髣髴として前鬼後鬼、怪しき識神の立働く趣があつた。

木蒐の目と魂をして鋭からしめ、耳を尖らせるためだと言つた。成程烱々として輝いて、

頭が尖つた。

和歌子が電燈を消さしたから、ちよろ〳〵と蠟の火が此の怪しさ空間を舐める。

「與四公、剃刀を出しておくれ、鏡臺の二つ目の抽斗よ。紅猪口があるだらう、序に――」

「何をするんです、奥さん。」

叫んで與四郎が驚いた。其の紅猪口に指を入れて、そして剃刀の刃を當てたから。

「否ね、十日や二十日、こまぎれの牛肉ぐらゐ扶持をした御主人で、此の大役をさせるのは木菟氏に濟まないからね。一時に千石御加増。本當なら股の肉を切つて遣るのだけれど、別にひもじい思ひもさせない。それまでにも及ぶまいから、指の尖をへづゝて、些とばかし、私の血と身を食べさせて遣るのだよ。――

痛い――痛さうねえ……ほゝゝ、」

和歌子は櫟つたさうに微笑んで、眉を顰め、

「卑怯なものだね、人間は。……覺悟しても、思切つて斬れないものだね。……與四公、一寸行つておくれな、お前。」

與四郎は疊を退つた。

「串、串戯ぢやありせんや、……そんな、そんな無鐵砲な――お爺さんに叱られら、」

と言つた、語の裡に、豫て、此の女の起居に、それとなく心附けよと吩附けた、花政の情が籠る。……

「何を云ふものかね、默つてりや知れやしない。それも一寸だよ、指の尖をへづるくらゐ……」

「奥さん、そして、何ですか、木菟が人間の肉を食ふ……食ふんですか。」

「食ひますでござるまさ。」

剃刀を見て、和歌子の指を殺ぐ、と云ふのを聞くと、何故か、いそ〳〵して、侏儒が、卓子臺の前面を、ひよこ〳〵と踊を踊る足つきで、疊半疊、行つたり來たり。で、一閑張の緣を手拍子で敲く。……其が、トコトントコトントコトンと、幽な狸囃子のやうに聞こえた。……時

に、しやがれ乾びた老人の聲で、然う言つたのである。

「もゝの身なら尙ほ甘露ぢやけれどもな、何處のでも可が、大好物ぢや。」

耳まで裂けて、爛れた口を、見るやうにした見えない目の瞼の、あたりが恍惚して、

「お河童。」

「うゝッ。」

「では、お前に賴むわ。」

「うゝッ。」一議に及ばず、白小袖の袖のわきから、あの、水搔の有りさうな手で、和歌子の眞白な手首を握ると、赤面を横に頰邊を甲につけた。

「あ。」

眉が顰むと、剃刀がカランと紅猪口のふちに鳴つて、和歌子の手を落ちた。侏儒は刄物に及ばず、黃色な向齒で食切つたのである。蠟燭の灯が空に靡いて、おなじ色が逆に下へ流れて滴點る……

「お退きよ。」

和歌子は、其の指から放さない血相の赫と變つて、赤いのに藍をさした凄い河童を、見えないながら突退けた。

「血も紅猪口に入つたの。」

「うゝッ、うゝッ。」と言ふ。

「木蒐どのに食べさしておくれ。」

「うゝッ。」

木蒐の眼が一双、凸に光つて、侏儒の手に籠を出た時、さすがの小僧が、頭から半纏を引被つた。

血は、引散らした懷紙の幾重を染めた。

「食べるかい。」

「うゝッ。」

食べて？」

啖うた、啖うた、御馳走樣にござるまあす。」

「お寄越し……」

和歌子は木蒐を抱いたのである。カチ〳〵嘴の鳴る音して、もく〳〵其の面と胸が膨れたはたゝく翼は、蠟燭の火を煽つて魔風に伏せる。

「さあ、私の身代りに、お前、槇原の邸へ入つて、其の目で白菊の顏を見てお遣り、霧之助と云ふお小性の家來が居るとさ、そんなものは構はない、白菊だよ――與四公。」

「えゝ。」と、きよろついた顏を出す

「確乎おし、賴んだよ、さあ……」

奴は木蒐を抱き取ると、魂が入つたやうに、ぶる〳〵胴を震はした。

「遣つけろい。」

「あゝ、下駄は要らない、何うせ脫ぐ。」

燭を取つて、鉢前の緣の雨戸に、すらりと立つ。小袖垣に散り際の山茶花と、裂け亂れた膚の衣と、灯影に對の薄紅。

庭は一面の霜を置いて、幽な月が針を散らす。和歌子は跣足で、與四郎に續いて、侏儒に袖を引かせながら下立つた。

豫て手筈は合はせたり。隔ての杉垣を足がゝりに、すらりと上ると、大な樹の枇杷に潛つた與四郎の黑い影は、木蒐を抱きながら、風の傳ふ如く、さら〳〵と鳴らす葉が、梢の中に傳はつて、技はづれに、槇原の裏の物置の屋根に拔けた。唯、高波を虛空に連ねて離れて續く、母屋の棟。

唯、身構を直すと、其の棟がくれに。鍬形うつた片鎌の月が、きらりと大庭の彼方の落葉松の葉隱れに成つて恰も消えた。

黑猫の如く、背を立てゝ振向いて、

「灯を、奧さん、暗くて見えない。」

密めた聲が、枇杷を梢を霜に響く。

和歌子は褄を高く取つた、膝の紅惜氣なく、脛を霜より白々と、杉垣に足を掛けた、が、目なし鳥。侏儒を引寄せて、背中を、肩へ乘つてスツト立つ、と雪なす衣紋が垣を越す、裳が落ちて、河童の皿の綿帽子。

「うゝッ。」

「靜に――」

十三

燈をかゝげつゝ、

「見える？」

「まだ。」

で、遠灯を屆かすべく、燭を取つて、袖を背へ引くと、大屋根の瓦が縱に一百枚、もとに映つた黑髪の偉な影が、林を倒すが如く枇杷の梢を壓して、女の顏が、衣紋を半ば、美しく凄き白蠟の面の如く垣根を越した。

「きやッ。」とばかり、門番の爺やが此の姿に早腰を拔いたのである。

これより前、魔法の猿が槇原の屋根を這腰つて、破風の引窓を搜し當つるや、中へ木蔦を放つと齊しく、ぬつと突立つたと思ふと、ちよろ〳〵と甍の波を渡返して今度は荒い、ぐわさぐわさと、枇杷の樹をもとへ戻つた。

「遣つたよ。」

「まあ、嬉い、靜かにして。」

ものゝ十四分經つたであらう。寂靜まつた槇原の御殿は、忽ち、戸障子が轟き渡つて、板戸襖の倒るゝ音、物凄く陰に響き、陽に鳴りはためくと聞くうちに、悲鳴を上ぐる女の聲、喚き叫ぶ男の聲。宏壯なる新屋形は眞夜中の都に唯一軒、七轉八倒するよ、と見る〳〵、部屋々々口々から、溢こぼれるやうに成つて、玄關へ、庭へ、臺所口へ、人礫で驅出し、飛出す。地震だ。

火事だ。後で聞くと、火の玉が座敷々々を舞歩行くと見たのもあれば、緋の衣の山伏が大跨に寢床を踏越ゆると思つたもあり、中には奥殿の霧之助が突如として氣が違つて、大刀を抜いて切つて廻るとあやまつたのもある。範子と云ふ姫様は猿が寢床へ潜つたと見た、此の姫が、巴の如く立騒ぐ家族の中を、半ば夢心地に戸惑ひして、奥の室へ驅込む飯炊の女と摺違ひに、臺所口を遁出して、あれ〳〵と聲を揚げた——

時に、御殿の騒動に、目を覺いた門番の爺やが、用心棒と間違へて高箒を小脇に取つて出た處、姫の聲を聞いて驅着けたのが、垣根越の和歌子の姿に腰を抜いたものである。

實に、申譯の無いばかりだつたのは、御前様御二方、お上の御寢室。で、もの〻音に揃つて立上ると、一大事に驅つけた家令が開けた襖を潜つて、ばさりと踊込むだ、木蔦の舞あるく眞赤な外套。

「火がついた。……衣服に！」

と、仰せられると、奥方は裾をまくつた丈で濟んだが、あはれ殿様は丸裸、御家風とあつて

欝紺色した越中褌。

姫の聲が人を呼んで、玄關番の書生をはじめ、家扶、家從、小間使も、物置前へ押合つて枇杷の葉がくれの白衣を見た。

蠟燭をさし出し、

「垣根越にお見舞を申上げます。」と、和歌子が濟まして言つたのである。

扨て、其の夜の中に、むづかしき顔の家從に書生が附添ひ、交番の警官が加はつて、いづれも色を變へて、表から露地を入つて威丈高に談じかゝると慇懃に手を支いて、

「お恥かしい、雀宮の不束さに飼鳥を遁しまして——」と、しほらしく言つた。

其を又何うしよう。中にも握太な洋杖を持つた書生は、其の洋杖を尻尾の如く卷いて歸つたが、木蔦である。魔の女の使者は、翌早朝、朝嵐颯として、社の大銀杏の葉の遠くから、はら〳〵と舞込む中を、血だらけの死骸に成つて歸つた。

繩からげにして持込んだ、近藤友英の口上が恁うである。

「奥殿まで亂入したが、霧之助殿が、太刀でお仕留に相成つたぞよ。」

自分に取次いで、これを見た、和歌子の瞳は霜を拂つた。――散込む銀杏が黄楊の櫛、其の髪を掠めて飛ぶ。

十四

「他人に話せば惚氣に成る、けれどもね、お前さんに言へば懺悔に成る……」

「佛様あつかひですな。」

「可いぢやありませんか、其のかはりお肴がどつさりあるわ。」と言ふ。

餘り澤山はない。一閑張の兀げた上には、例のハムサラダの大皿と、白丁の一升徳利、眞中に、銀杏の黄なる落葉を塗盆に褥の如く敷いた上に、木蒐の死骸が血を黑く、外套を緋に、嘴を落し、翼を萎して横はる。

此の日、木蒐のために追弔を兼ねた謝恩會を開くと言ふので、和歌子が自分に通りの花屋へ出向いて迎へて來た、床の間の上客は、小僧の與四郎。もう一人は、境木敏夫と云ふ、右の毛の長い美術生で、此は溜池邊の下宿に居るのを、自働電話で呼出した。

御馳走は他にある、うで玉子。……小僧の分は、鹿の子餅、饅頭。……侏儒は一枚の肉と五個の玉子を頒たれると、其を持つて例の木戸際の物置へ引込むだ。恐れながら天にます基督が爾か爲さしめ給ふのであらう、此の河童は、敏夫の顔を見ると、夜中でも物置へ入つて出ないのが例であつた。

座に、お馴染の小搔卷、菊に水仙の友染と云ふのが無い。今日の入費に消えたのである。

和歌子は落葉を被つた木蒐よりは薄寒さうな肩つきである。が、微笑の瞼はほんのりと、小春日の影を盆に注いで、

「お聞きなさい、――敏夫さん……、此の木蒐にはね、私の情人の血が通つて居るのよ。」

「驚いた。」

「おどろかなくつても可いことよ。情人の話をするんだから。それだから、他人に話せば惚

氣に成る、敏さんに言へば、懺悔に成る。」

「そんな事は構はないがね、木蒐の血とは何うしてゞす。」

「あのね、此の木蒐はね、與四公も、よく知つてるが、川越の町から秩父へ入る伊草村と云ふ處から出たものなんです――私がね、こんな身體に成らない以前だわ、お孃さんで……最も唯今でもお孃さん、可ござんすか。」

と、華奢な手でよく持てる、一升德利を片手つぎに硝子盃で受けて、

「名はお預りにしますがね、洋行歸りの醫學博士と、それはね、親たち、媒酌人、天下晴れた結婚をしたのよ。博士夫人十七さ。其の時は花櫛、花笄、氣取つたもんです。……博士はね、西の方の大學に勤めて居たんですが、三年目に久しぶりで東京へ來ました。一度故郷へ歸つて、序に私も親類廻はりをする事に成つて、行つた先が川越なの、川越の町に製糸場を遣つたのが博士の實家よ。ですがね、うまれは伊草村なの、事業をするのに、農家が町へ出たものなの。……

あの、山は秩父の山だけれど、伊草に白山の御宮があります、比咩神社、產神樣だわね。生れた土地の鎭守だから其處へ參詣をする事に成りました。右の新夫人が御一所に高髷か何かで氣取つてさ、時節は可わ、錦葉の頃。わりに暖い年でね、でも十一月末でした。

三里と云ふ　田舍道は長いのね。俥で、がた〳〵行く途中、弱つたのは、材木だの、瓦だの炭俵ね、薪、いろんなもの、柿の籠なんかまで積んだ牛車が、幾臺も、幾臺も、二間三間づゝ間を置いちや、しッきりなし。大な牛の角なんか、乘つてる俥の泥除を越すの。中には濡れた鼻を仰向けて、ムモオなんて人の顏を覗いたり、白粉を塗つたやうに、額へ霜をかけたのもある、朝が早かつたわ……町を離れて、四五町行くと、もう牛車でね、狹い畝道を畝り〳〵でせう。遠くの山の霧の中から、雲に乘つて湧いて來るやうに續いて、牛の數が果しがない。新夫人弱つちやつた。もう、泣きたく成つて……あら、可厭だ。もうと云つてさへ牛の聲で、爾時を思出す。

（歸りませうよ。）（詰らん事を云ふな。）と博士と遣合つた處が俥の上でせう。焦つたいから疳

癪を起して飛下りると成れば、牛の背へ乘るんでせう。

可厭で〳〵死で了ひたいやうな氣のするのが、漸と蘇返る思に成る事がね、途次不思議にありました。往來が提防に成つて、づッと何處までも路なりに畝つたり、曲つたり、田の用水かと思ふ小さな流があるんですがね、其の小川の處々、水瀨の淀む木の下だの、石段の角だの、流れに堰のある處と云ふと、屹と水に浮かして、菊の花と水仙を置いてあるんです。菊は黃菊と白菊のみだれ咲、紅いのに、中には小菊、野菊もあつてさ。活けてあると云ふんぢやありません流のなりに泛したんですから、活花を背戸へ棄てたんだらう、それにしても綺麗だ綺麗だとはじめ二三ヶ所で　唯然う思つたばかりだつたんですがね、段々床しくなり可懷しくなりました。幾處と云ふ事なし。……大概、瀨の工合と提防の勾配で見當がついて、其處に、それ彼處にと、思ふ水には屹とある。一寸々々、野社、堂も見たし、塚、石地藏も路傍にはあつたんですがね、其には一つも手向けてない。それとも土地の風俗で、何かの、あの、花の供養と云ふのか知ら。――車夫に聞いても知らないつて言ふの。何しろ、嬉しい、優しい、しほらしい。

それに氣を取られて、片側ばかり見い〳〵三里餘、牛車も、そんなに氣に成らなくなつたんです。

白山の御宮の森へ着くと、鳥居の前で、其の川は、路と擦れ〳〵に淺く成る。土橋が架つて橋の袂に、また流に、水仙と菊が挿してあつたんですがね。

お聞きなさいよ。境内へ入つた手水鉢を見るとね、それには一輪冬牡丹。」

和歌子は弗と床の間の柱を見た。――いつぞやの、あの面影は早や消えた、其の花片に色の紛ふ酒に亂れた衣紋を合はせて、

「森々とした暗い中に、燃えて、魂が、一ッ落ちてるやうで美しいが凄かつた。御宮は靜かな、其は神寂びた鎭守樣でね。御堂の中に、雪のやうな神馬が一頭、其は可いけれども、屋根裏には白蛇の大いのが棲んで居るつて言ふんぢやないの。……私でなくッちや、女は入れはしないわね。

其時さ、奇體だつたのは、十五も二十も、大いんだの、小さいんだの、澤山繪馬が納つて〻

ね、皆それに、」

目を合はせて、敏夫も疾や其の意を悟つて、齊しく銀杏の落葉を視た。

「どれにも木蒐が描いてあるのよ。三體見まい聞くまいのやうなのもあるし、飛んでるのもあれば、留つたのも固よりだわね、皆、頰邊を恁うやつて、」

「お止し、お止し。」

「あら、與四公も遣つてるよ、頰邊を。」

「へゝへ。」

「御堂の中が、目に成つて、喙に成つて、翼に成つて、何十羽だが皆活きてるやうぢやありませんか。畫も、朝のうちだつたから可いけれど、月夜でゝも御覽なさい、ばさり〳〵飛出し兼ねない。——森で眞個のが一ころ號令を掛けたら何うでせう、揃つて啼くわ。中にも人を馬鹿にしたのは、繪馬が倒れかゝつて、白馬の鞍に乘つてる酒落た木蒐ちやんがあるか、と思へば、落ちて仰向けに轉がつて居るのもあるの……うまいなあ〳〵ッて、繪の好な博士が感心をして居たわ。何う云ふわけなの此所說は。博士も知らずさ……小兒の時分お宮で遊んだ博士は此の繪馬を見なかつたつて、——自分の亭主を博士々々……豪さうだけれど、今は他人だ、まけておけ。」

と冷酒を煽る。

「僕も飲め。」と、敏夫が硝子盃を。

「盃を合はせませうよ。」

「何故？」

「博士の健康を祝して、」

「厭なこッた。」

「可愛いね。」

「澤山だ。」

「何うして、此のあとが肝心な木蒐の話なのよ。」

「否、その、木蒐が澤山らしい。」

「あら、罰當り。」

と目を涼しく、

「私を、いろに持つたのも、敏さん木蒐が媒酌だわ、ほゝゝ、結ぶの神を失禮な。」

此の金と力の無い青年は、恁う言はれても仕方があるまい——

今年秋のはじめ、學校なる教室の前の櫻の枝に、戸惑ひをして留つて木蒐が一羽あつた。素早いのが、ひらりと窓を飛んで生捉ると、孔雀の標本をはたき出して其の籠に安置した。然らぬだに、もの凡て平かならずとして、筋骨金風に鳴渡り、不羈と自由を生命とする美術家が、我が佛得たりとなし、總勢二百有五名、立處に同盟の鯨波の聲を合せ、各自が、紙袋仕立の木蒐の面を頭からすぽつと被つた、一列を長蛇に備へて、折から某展覽會開展の初日と云ふのに大公園を練廻つた——

先陣が拂をかける。

ホッホー先のけろ、ホッホー先のけろ。

後陣が制止を放つ。

下アに、下アに——下アに、下アに——

袋の中の聲を揃へて、

木蒐殿の御通りだ、木蒐殿の御通りだ。

（ホッホー先のけろ、ホッホー先のけろ。

下アに下アに——下アに下アに——

木蒐殿のお通りだ、木蒐殿のお通りだ。）

不思議な事には、山中の烏が眞黑に成つて雲を蔽うて啼燥いだ——

其の時、籤に當つて、唯一人面を被らず、氣勢に逆立つ、長髪の頭に、木蒐籠を頂いて、校中名代の背高が、列の眞中に、いどゞ爪立つて押したのが境木であつた。——此の役は樂でなかつた——かはりに、人動搖の中から一人、ふるひつきさうな貴夫人姿の艶なのが、ッと、摺

違ひ狀に、衣兜へ紙片を挿んでかくれた。

和歌子が、それに、鉛筆ではしり書したのは、簡にして要領を得て居るから、其の全句を拔く、曰く……

「――モデルに成つて上げませう、雇はれるんぢやないから、私の内へ入らつしやいな――」

十五

「土橋を渡つて、羽織袴で二人連立つてね、鳥居前から、もう帽子を取つて、進んで階の下へ來て、一人が恭しく禮をすると、一人の老人の方はね、差した扇を膝に開いて、土下座をしたぢやないの。

博士と私が立つて居たから、急いで、神馬の前を傍へ退いて上げてね、あゝ、神樣を拜むのに、此の位な心持でなくつては、と其のね、眞實なのが、何だか、私、身に染みて胸が切つた。

然うすると大變よ、二度目のおじぎは博士にしたのさ。まあ、何うしたら可いだらう、と思つた。……（貴方樣は××博士で入らつしやいませう……本日此の白山樣へ御參詣のことは、町から傳へ承つて存じて居ります。――）

あの、村をすぐつても、途中まで出迎をしたかつたけれど、二人ぎりで生神樣へ來たのに、却つて心を騷がせやうから、それは控へた、と言ふ口上でね、若い方が然う言ふの、少いたつて三十六七さ。老人の方は、其の父さんなのよ。でね、（弟か）（次男か）と二人で云ひます。

東京の美術學校を半途でよした、弟が病氣をして居る。其の診察を賴みたい、――其の時、分つたわ。小川の小菊も、御手洗の牡丹も、私たちの來るのを知つて心ばかりもてなしに、背戸畑のを折つて挿した、が、それは親兄の手ではない。病人の弟が自分でして、と云ふ事よ。何うして、まあ、袴で醫師を迎へようッて人が然うやつて花を配つたらうと思ひましたがね、成程、分つた……啞なの。それも中年からなんだつてさ、其のために學校も引いた、と言ふの。

でね、可恐く頑固で、强情で、幾ら勸めても、自分では醫師に診て貰はうと言はないし、固より藥も飲まない。……然うかつて親兄の身にとつて、默つて打棄つても置けないし、二年と

三年分別に盡きて居た。思掛けない片田舎へ博士のおいでは實に佛樣のお引合せであらうと思ふ、何うか手前どもへお立寄下すつて、診て遣つて頂きたいと、そりやもう氣の毒なほど、手を突いて賴んだよ。

一も二もありやしない。すぐに行つて上げるだらうと思ふと、博士がね、斷りました。」

「斷りましたか。」

聞いて居た敏夫も、案外な樣子である。

「えゝ、斷りましたよ。（私は內科だから分りません。）捻つたわね、先生、實際咽喉科ぢやないんですからね――否、決して惡くは言はない、――博士の責任を大事に思へば、其の方が當前。……又、實際年は若いけれども、眞面目な學者なんですからね、對手がお百姓だからなんぞ、と思つたんぢやありません。それは私にも分つたけれど、此處は奧さんの役でせう……人情に弱んでね、分らないまでも診てさへあげれば、醫師が嫌ひな病人――それも嬰兒と思へば憎くなし――親御、御兄弟の氣安めだけにも是非貴郎。……で以て、新夫人、艶のいゝ圓髷の意氣好みで生意氣な、藤色鹿の子か何か橫にして見せたから、博士が默つて頸いたわ――牝鷄の閧とか何とかさ、忘れたけれど……旦那が板倉內膳正でない限りは、一寸女の差出て然るべき所だわね、ほゝゝ、何が然るべきだらう。」

笑つて息續ぎを引掛けて、

「二ッ三ッ、おたしなみのお職掌道具を入れた革鞄があります。車夫が持たうと云ふのを、故と奧さんが御手づから。少々煩かしく言へばね、大學の分科の專門をして、一寸……神聖ならしめようとすると來たものよ――まあ、お聞きなさい――博士の自信をまげさしたから、心持を惡くさせまいと精々御機嫌を取る氣か何かで――大きに家庭劇を發揮したの。

屋根は見えて居ました。車にも及びませんの――路は別で、あの小川の流には分れたので、水はあつても、それから前に、小菊と水仙は流しては無いのだけれど、舊來た水の影のやうに、づッと行末の雲にまで色が映るやうな氣がしたわ、空が澄透つて、秩父の山々、武甲山、笠山が、ぽつと紫に霞んでね。

が構内へ入ると、下男、下女、大勢ばら〳〵出迎へたのよ、大百姓と見えるわね。一度御休息と云つたけれど、博士は急ぐから早く診ませう、其の方が勝手だつて、すぐに病室……ぢやない、張出しだと言つたわ。其の弟と云ふ男の居る處を……其處へ引籠つてる、めつたに母屋へも出ないんだとさ――啞で、片意地の、旋毛が曲つて、陰氣に引込むでばかり居るのだらうと思つたの。

――さあ驚いたわ、大變だッちやない――啞の片意地の旋曲りで御勘辨が願へますかッて。……あの水に、花の道しるべが無がつたら、可加減お轉婆な私だけれど遁出して了ふ處だつた何うしたッて處ですかよ、――敏夫さん――

ね、成程張出しだわね、疊百疊敷ぐらゐ、床も板張りで、四方を圍つた、がらんとした、然うね、何の事はない、椅子卓子を取拂つた學校の教場を云つたものなの、四方三方、木蒐の繪で充滿。」

境木も、與四郎も眼を睜つた。

「木蒐の天、木蒐の地、木蒐の城だはね、……繪馬も分りました。」

と言ふ時、和歌子の瞳は、秩父の山を見たと云ふ、透明、冷朧とした其の空の思はるゝよりも尙ほ澄透つた。

「繪が拔出したのかと思ふ、ばさり〳〵飛んで歩行いて居るのがある、どれが眞個ものだか分らない。中にはね、描損つたと見えて、折つたり、摧いたり、引裂いたりした、大な目一ッ耳の尖つた頭の欠け片、片翼、床にちり〴〵に成つて、こんなのに影が湧いて、却つてむくむく動きさうでね。おまけに樹林の中でせう。天井硝子張の明取から、枯葉の樹の枝の映るのが網のやうに擴がつてゝ、何だか、魔に攫はれて樹の上を傳はるやうで、足もわな〳〵する。

向ふに、一段高く築いた、お湯屋の番臺見たいな床を組んで、薄汚れた服裝して髮を眞直に逆立てゝ、度の強い近眼鏡を光らして、繪筆を引攫んだまんま、客と見て眞四角に坐直つたのが、肩を怒らした背が高いから、宛然、ぬくり突立上つた形なのよ、御次男です――敏さん。」

「……」

「貴方と學校は違ふけれど、矢張り美術の生徒だつたの、一寸御紹介申しませう。」

と、貧乏徳利でがふ〳〵と酌をして、

「吉岡展――展は展覽會の展の字よ。」

「僕は落第だ。」

と、ぐい〳〵と硝子盃を引いたので、注ぎかけて居たのが溢れて、淋漓として滴つた。

和歌子は濟まして徳利を控へて、

「あんな處へ及第をしたがるのは女房の欲い人さ……其のかはり情婦は出來ない。」

と片手を頰杖して顔を見る。

「飲め！」と、半ば苦つて、半ば笑つた。そして半帕で膝を拭いた。

「親御と兄さんが、默つて唯叩頭をするのよ。博士が爾時ね、可恐がる私の手を取つて、つか〳〵と出た。――木蒐の憑ものがした啞の狂人、いきなり兩袖を羽打つて天井へ舞上りでもしようかと思つたら、立派に丁と謹んで挨拶をしました。筆を劍のやうに片膝に突立てゝね。

おとなしく診察をして貰ふのよ。……明窓をあけさせて、叮嚀に身驗を觀て、更めて、それから瞬もしないで咽喉を診ました。

「治る、今直ぐに治してあげます。私の言ふ通りになさい……然う云つた。」

――（博士の態度は肅然たるものであつた、）――

「少し身體をあとへ引いてね、博士がね（――私の聲にお續きなさい。）……と云ふ。

啞は頸いたんです。

「い」と博士が呼ぶ。默つて居る。「ろ」博士が呼ぶ。默つて居る。「は」博士が云ふ、默つて居る……」

與四郎は聞きつゝ、ごく〳〵と咽喉で云つた。

「いろはにほへとちりぬるを、一つづゝ言つても聲の出なかつた其の啞がね、「わァかァ」と博士が言つたと思ふと……「わ―か―」……啞の咽喉から聲が出ました私は博士を神だと思つた。拜みたく成つたんです。

も一度、博士が、「わ―か―」

「わ―か―」と啞が言つたと思ふと、

「和歌子さん。」

其の聲で啞が呼んだの。木蒐がものを言ふと思つた――私は思はず、ぶる〳〵震へた。

「(和歌子さん、――貴女は私を御存じあるまい。私はよく知つて居ります……私は戀をして居ました。御結婚が終つたと知つて、噫萬事休す、男子世に生れて、口に戀人の名を呼べないくらゐなら、一生、末世、金倫際、聲を出す事は斷じて要らん！――其時から夢にも口を利かんのです。不思議な運命は死に先だつて御主人の前に貴女の名を呼ばせました。)」

――博士に――

「(御診療を謝します……が、貴下は敵だ、道を清めて心ばかり花を棒げたのは、貴方を迎へたのでない、奥さん――和歌子さん、もう一度貴女の名を呼ばして下さい……和歌子さん。)」

「(はい、)とつひ知らず、返事をすると、颯と色を變へたと思ふと、眼を塞いだ、あれ、血が唇を。舌を嚙んだ。忘れもしない、凩が颯と卷落すと吹込む銀杏の葉と一所に、繪が飛んだのが、窓を舞下つたのか、大な木蒐。」

和歌子は、思はず、盆の銀杏の葉を取つて、唇に當てゝ、犇と嚙む、と皓齒が鐵漿を染めたやうに見えて、其が不思議に初々しく、瞳は涼しく、頸は清らかに、心の影の塵も留めず、通ふ血汐ほ霞を描いて、同じ女にも又較ぶべきなき美しさであつた。

「ねえ、苦しさに、仰向けに血を噴いたのが、飛下つた木蒐に颯とかゝつた時、私は身體を投つけて――あゝ、死んぢや、不可い、冷くつて。」

其の盆の木蒐の嘴に――涙の顔を振仰向く、と啊哪な微笑。

「與四公。嘴を。」

突如小僧を横抱きに抱轉がす、石頭の大な木蒐、重量、十四貫三百匁。

十六

「失敬しよう。」
「おや、飯るかい。」
「勿論です。」
「何故さ。」
「それまで聞かせられて、これまで見せられりや澤山だ。苟も僕は男だ。いつかの行列の事を思へば、そんなんだと、僕は、木蒐に頭を蹴つけられたと同じ事だ、馬、馬鹿にしやがる。」
「ふゝん。」
と笑つて、
「妬くね、此の人は。おや可笑い。――男の嫉妬を妬くのは、婦の不品行よりか世の中のすたりものだよ……見つともないわね。」
「何うせ見つともよくはないんだ。」
「勿論、見つともよくありませんとも、髪は長いし、顔は長いし、日は短し、靴足袋は破れてるし、ね、――然うさ、また、あの木蒐を擔いだればこそ不思議に色が一ッ出來たんだわ。色と言ふものは亭主ぢやないんだよ、可かい。でも、お前さんは可愛いことを云つて。(自分は半分苦學をするので、腕はなし、働きはなし、何の手助も出來ないから、こんな事は言はれた義理ぢやない。が、心の中を察してくれたら……そりや他に、人も、男もあらうけれども、せめて、自分の目に見える處へだけは、誰も寄せないでくれろ。)――と言つたね。……言ふことが氣に入つて、しほらしいから、爲なくも可い我慢をして、御覽な、まあ、此の頃の、内の體裁を――お姫樣が其の日ぐらしさ。恩には被せない、私が勝手――道樂だから。串戯にも妬けた義理ぢやないぢやないか。けれども理窟は言やしない、憎くはないから。だけども男の妬嫉は見つともないからお止しなさいなね。」
「濟まない、が、餘りだ。私は妬きませんが、妬きませんが、飯ります。飯つて、木蒐の繪を描くんだ。」
「あゝ、結構。……御自分のためにも、親御、御兄弟、世の中のためにもお飯んなさる方が

結構です。……ですが、いろの爲には何にもならないから。……然う思つて居らつしやい。そんな掛引はね。」

「進退！　進退とは何だ。」

「ぢや、眞個にお皈んなさい。が、一寸お待なさいよ。」

卷莨を吸着けて、

「さあ、」と、くの字で持つて出す……吸口を男の唇。

「いや、兎に角皈るから。」

和歌子は艶に莞爾して、

「ほゝゝ、だから、露地を吸つてお出掛けなさいな。誰も留めはしないから。」

いや、然う言はれると、まさか、一本貰らつて出られもせず、其處で敏夫は押立尻をして、

「飲んで行く……」とばかり、冷酒の硝子盃の殘餘と煙草をちやんぽん。吸つちや飲み吸つちや飲む。――與四郎が居たらば其も出來まい、石頭の大木蒐は、今の一件に羽を生して、露地を横飛びに飛んだと知るべし。――

「あとは獨言よ、聞かうとも聞くまいとも、煙草の間……」

和歌子は投げた手を額に當てた。

「あゝ――博士が些と妬いたわね。――私は其の時、舌を食切つた啞を抱いたと思ふと、後を知らない。母屋の座敷で氣が着いて、泣く人やら、欝ぐ人、考へる人、俯向く人、默つた人に送られて、博士も矢張默然で、白山樣の前まで歸つた時、然ふだ、ふつと氣がついて、

「あゝ、牡丹を持つて來よう。」――手水鉢に――木蒐の畫を描く男の、鬼火が光るんですもの。

「止せ、そんなもの。」

「否、止さない。」

博士の留めたのが口惜いから、驅出して、羽織の袖に抱いて歸ると、可厭な顏をして睨んだから、もう一度拗ねた。――「私は人間の道を歸るのは可厭です……牛車が可恐いから。……」

其の時は、一臺の影も見えないのに――「否、往つたものは屹と歸る……途中で逢着すに違ひないの。」然う云つたのよ。博士がね、

「何處を歩行く。」

「此處を歩行くわ。」

でね、駒下駄を脱ぐと足袋跣足で、石垣から、褄も取らないで小川へ入つた。早い處を瀧を上るやうな勢で濟まして渉ると、博士の俥が矢のやうに飛んだんです。それを見ながら、水が深く成つて倒れました。

一晩、伊草村の御厄介。あくる日、歸らないと云ふのを歸さうとするし、送らうと云ふ展さんの葬式を送らせないから、途中まで、棺橋と並んで出た、私は駕籠で。大勢に取卷かれて、路を分れて川越へ歸つたんです――

御離縁申すまでもございません。自分の家からも御勘當、と云ふのがね、義理ある兄の代に成つて居ましたから、義絶と言ふの。

些と擽たいでせうけれど、一寸、惚れなほしては不可い事よ、此でも伯爵の御落胤なの。」と云つた――不思議に此の女、品が備はる。

「母さんは新橋の藝妓でね、止せば可いのに、若いから何にも知らずに、其の伯爵の世話に成つて、私が出來たとお思ひなさい。まだお腹に居た時よ。――ぽッと成りかなんかで、もう四月とか何とか殿樣に聞こえあげる、と何うです……伯爵が後とも言はず、其の晩、内證で待合の女房を呼んで、(彼女には内々で、客帳を開けて見せろ。)と言つたつさ、宿つた月日を當らうと云ふんだわ。外の客と引較べて、伯爵樣お手づから御帳合。赤子の出入帳は地獄にも沙汰を聞かない。女將も江戸兒だから癪に障らして、密と筒抜けにしたんでせう。母さんが、蒼く成つて、其つ切。――私を產んでからも世話に成らずに、意地を立通したけれど、苦勞をしぬいたもんだから、二十七の若死に、臨終に氣が折れて、九才に成る時、お邸の言條通り私を引取らせたッて次第なんですからね。急拵への御姫樣、面倒くさい――母さんが中程住替へた柳橋に居た時が忘れられないで、幾度驅出さうとしたか知れないの、窮窟でね。何うせ、待合

の帳面に紅で印のついたお姫様なんだもの。

――露西亞は、のん氣だつた、生命は危かつたけれどもさ――

でもね、はじめ滿洲へ行くのに、博多から汽船へ通ふ端艇が出ると、麗な小春日に、光る魚が晃々舷を泳いだの。私、欲くつて成らないんでせう。「(タビ)さへありや。」然う言つた人がある。(二つあるから、澤山とつて。)と私、兩方の足袋を脱いで笑はれたわ。後で分ると對州の人だつたの、對馬ぢや(タモ)の事(タビ)とを言ふらしいわね。……

一寸、お姫様でせう。たゞし足袋だけに下つてゐる。」

「和歌子さん。」

「はあ……おや、更つて。」

「私は、貴女にや、まるで、今の其のタビですなあ。」

「酷く御感心遊ばしましたね。」

「考へなきやあ成らないんだ。」

「惚れてると云ふのでせう、そんな、煩かしい、謎見たことを言はないで、足駄穿いて首つたけと云ふものよ。」

「否、酒落ぢやない。」

「眞面目だね。酒がさめて……あゝ、薄ら寒い、敏さん、暖まらうか。」

「いや、歸ります。歸つて木蒐の繪を描きます。」

「然う、更めて、身の上話に、同情とかッてのをしてさ、奮發して、私を何うにかして下らうと云ふのならお止しなさいよ。何うせ初から貴方は玩弄なんですもの。怒つちや不可い。珊瑚も金剛石も、言つて見れば玩弄品だもの。木蒐籠を被つたつて、それが、私に……立派な彫刻か、繪に見えれば、貴方は貴いものだわ。それとも、口惜しかつたり、妬けたりするのならお止しなさい。私にや、意地を張ると後悔するから。」

「何を後悔。」

「未練が出て、暗夜に此の邊をうろついて、私が、あの、白い寐卷で、裙と手に紅い火のち

らつく處を、見ようものなら、……後悔するから……さ。」

敏は、蒼く成つて、其の將に然るべきを豫期しつゝ、然も如何とも、する能はざる苦悶の色を漲らしたが、さすがは男だ、衝と立つた。

「失敬。」

「ぢやあ、然ようなら。思はせぶりに送りませう、兩花道の出と云ふ處……」

で、格子を出る男の、あとから、緣を下りて木戸へ出た。其の時、何故か、床にあつた、あの揚弓を手に取つた。

庭の木戸へ、此の姿が片扉で立つた時――(花政の一捻りに今は鋒先を納めたが、店だてを强請して斜めにはつた)――貸家札も、かしくと讀める風情あり。

白衣に灯す、蠟燭の、白脛ちらめく緋縮緬、白晝なから俤立つて、敏の足が羽目について淀むだ時、恰も町通りを縱に打つて通る××師團の騎兵少尉の、立派に盛裝したのがあつた。駒は山の如く露地を壓した。的は大い、射ごろは可。

和歌子が輕く曳いて弗つと切る、と白羽が發と馬を射た。唯棹立ちに成つて、嘶く聲より、拍車の音が鳴響いて、見事に乘鎭めて、飜然と下りた。咄嗟に、革手綱を高く取つて、露地を見込むだ、風采を見よ。

「誰だ」

「何をする。」

敏が、思はず我事のやうに言つた。

揚弓を小脇にして、

「羊のかはりに、七面鳥を食べるの……クリスマスが、近いから。」

翌日は、早や花政の店の中へ、劍を鳴らして其の少尉が直立つた。嬉しさうに花を見ながら

「牡丹を――」

十七

「お河童。」

「うゝ、うゝ。」

「眞暗な路だね。」

「うゝ。」

「お前は私を引張つて、どんな處へ、何處へ連れて行くの。手水鉢に牡丹の花の活つてる處かい。」

「うゝッ、うゝッ。」

「ぢやないの、然うね、何うせ、そんな心意氣は知らないから。屹と何だらう、昔噺のやうに、寶の瓶の埋つてる處だらう。」

「うゝ。」

「おや、嬉しいね。」

と微笑んだが、雀盲の瞼は寂しかつた。……和歌子は――(其れより後、幾度も幾度も、其の白衣に灯した姿を緣に露はして、暗路をあこがるゝ敏夫を知りつゝ、堅く、木戸を鎖し鎖しするうちに、彼が發狂して自殺した事を聞いて。)――したゝかに酒を煽つた醉心地を、頻に侏儒に袖を取つて曳かれて、庭の木戸から、物置の前を、半ば夢心地で町へ出た事を覺えて居る……

が、方角も何も分らぬ。唯侏儒の導くまゝに袖をまかせて行くのである。現ながら、此の怪面異體のものゝ、我が身を載せて趣く前途には、いづれ奇蹟があらうと思つた。あはれむべきは、そして其の期する處は、牡丹の花の一本より、戯に言つた寶の瓶より、實は一條の光であつた――恁くまでの婦にも――恰も其の病にかかつた棄身の出來心で、ふと曼球沙華を折つた雜司ヶ谷の途中から連戻つた畸形兒であつたから。――

――袖を任せて行くのである。唯、霜のしん〳〵と降りる夜の、風も無いのに、前途が颯々

と裳を切る。

「頓馬が、一所なの。」

大な犬が、ひた〳〵と裾に摺れつゝ通るやうである。

「うゝ、うゝ。」

「どつちだか分らない、お前が乘つてるのぢやないか。私が乘つてるのか知ら……」

また、もの音に打傾いて、

「牛が曳く車が通りはしないの……瀧車かね、水の音なの。」

「いんま、川を一ッ渡つたぢや。」

「あら、私は空を飛んでるの。」

と思ふと、身體が浮かないで、足が雲ならぬ地を踏みつけた。然も段々に低く降りる。泥の香、樹の匂が芬とした。

餘りに足が低く下りた。

和歌子は、爪立つて裾を留めた。

「お河童。」

「うゝ。」

「何處だか、教へておくれ。……口惜いが、見えないから。」

「うゝッ、見えませぬか。」

「察しておくれ、だらしは無いよ。」

と、俯向いて白い手で探ぐる、とにちやりと滑らかして、侏儒が其の手を取る。

「もう、やがて見えるぞよ。」

和歌子は振拂ひもしないで、

「あゝ。」

「それ、星が見える。」

はッと思ふと、晃々と霜夜に冴えた星の數。が、其の星は、高く蜘蛛の巣の如き樹の（枝と

思ふのが、）土を抽いたあらはな根に散る……横穴を穿つた深き地の底に居たのである。

「彼に燈がある哩。」

大なる樹の切株を卓子の如く一段高く据ゑたのに、かんてらめいた燈火が點れて、正面の土饅頭を、椅子にして、ぬい、と、向ふ面に腰を掛けたものを何とか見る、小牛の如き黑犬である、トーマスの頓馬である。這奴、のつぽ面の垂耳の頭に、紅い土耳古形の帽子を戴き、空嘯きつゝ、チン〳〵の手が、此方を横風に麾いて、

「わあ、わあ、わあ、わあ。」

和歌子は夢だと思つた。思ひながら、然も氣丈であつた。侏儒の且つ引くまゝに、つか〳〵と燈の前に進むと、

「ごろ、ごろ、ごろ、にい。」と、鳴いて、椅子の横に腰を掛た、古猫が一疋居る……見覺えがある、あの、錦木の宿のあたりを押歩行いて、屋根中を汚す風來の、男猫で、（――官吏の家に飼つた、駒と云ふに優げな雌猫を狙つて、嫌はれ通しの腹癒に、其が產んだ小猫とゝもに、對手の猫を食殺した――）顱破れの三毛が、釜底帽子の青いのを被つて、爛々たる眼を光らし和歌子を睨迎へて呻ると齊しく、鋭き爪で、頤の髯を搔捻つて、片手で卓子の上に置いた一册の帳簿を示した。

和歌子は尙ほ信じた。恁る思ひに因つて雀盲が癒えるのであらう――指さるゝままに其の帳の面を見た。「……」「……」「……」花政の娘お光の名、眞前に記したり、嫁のお久、官吏の令孃銀行員の若い妻、和歌子が名を知つた居まはりの女らしい女は、一人もつけ落がない。槇ケ原範子。――子爵の令孃である。其の小間使が三人。湯屋の女房、花政の表町に錢湯があつて、女房が美婦なので、其もあつた。――

湯屋の女房。

名の上に、赤と、黑、汚れた黃で、不思議な、意味を爲さない點を幾つも打つてある。讀んで和歌子が、自分の性の錦木に瞳を据ゑた時、トコトン、トコトン、トコトン、と此奴は侏儒だから土饅頭の椅子へ、ひよい、と立つて、切株のまはりを敲いて、頸に卷いた、黃色な手帕

をひらめかしつゝ刎ねて居たのが、赤爛の手の、蚯蚓の如き指で、和歌子の名に指して、

「うゝ、今夜は、汝の番と思へ。」

「あれ。」

和歌子は、うまれて以來、嘗て知らない悲鳴を上げて土に跪き、よろめきながら、穴藏の段に飛つくと、上から、眞黑な面で、倒に覗いた、大牛が一頭、モウ、……ドン、と寢て、腹を以て蓋に蔽ふ。

「母さん、母さん。」

思はず、亡き母に救を呼んで、中空に縋る手は、左右に取つて開かれて、打込むだ杭に、其の兩の脛も縛められた。

「堪忍しておくれ、堪忍して——」

「おのれ、覺えとろか。」と云ふ〳〵、穴には彼等三頭ではない、鼬も鼠もどろ〳〵と滿充ちた片隅から、這出したのは按摩の色男久松市である。

「忘れまい、忘れまい。」

いつか、挫ぎ折つた二本の指で、女の兩の頰を交る〴〵、ふた〳〵、と嘲笑つて引彈かれた時は、其の冷さ、其の不氣味さ、其の可忌さが骨髓に通つて、亂れた黑髮が皆動いた。

懷に手を掛けようとすると、侏儒が横合から躍上つて、按摩の顏を蹴飛した。

「退れ、下郎、汝には食のこしを授けるのぢや。」

和歌子は帶を奪はれながら、伊草なる吉岡展の最期を思つた。彼は葬られたのである。我が亡體の、あとの屈辱と汚濁を察すれば、舌を嚙む事さへ出來ぬ。瞳は破れて曼珠沙華の幻の如く颯と血汐が眦を走つた。

時である。穴の上に、雷の如き音がした。づゝん、と大牛の轉んだ響。唯見ると、穴を下り狀の、蒲黃の袴、黑小袖、手に三日月の輝くは、晃乎と振閃めかした小太刀である。

が、忽ち眩んだ、和歌子の目には見えずして、

「うゝッ。」

眞先の、號苦の聲は侏儒。續いて、叫ぶ聲、呻吟く聲、驅廻る音、倒る、[illegible]

「や、や。」爽に清い矢聲の下に、颯々と鳴るは太刀風である。

犬が潜んで來て、牙が、和歌子の身に觸れた。

「あッ。」

「畜生！推參な。」

ハッと唯一打、後は死の如き、墓の如き寂寞であつた。

抱起されて、縋つた時、和歌子は見えない目に、男の髪の美しさ、と袖の薫を知つた。

手を取られて、萎々と成つて、肩と思ふに顔を伏せつゝ、嬉しさにすゝり泣いた。

「此處まで。……最う可い。」

と、手を放す。と力なく撞と成りつゝ、袖に縋つて、

「誰方、誰方。」

「御隣家の——霧之助。」

十八

和歌子は三の橋邊の何とか云ふ巨刹の鐘撞堂と、一株の大槐との間に、死だものゝやうに成つて倒れて居たのを、寺男に呼活されて、そして其の介抱で家に歸つた。歸るにも歩行けなかつた、左の太脛に鎌に掛けられた如き痕がある。

境の自殺したのを聞いた晩、三升有餘——ウオトカ仕入れの酒量は強い——酒を煽つて、ぶら〳〵と、家を出て、何處を歩行いたのか知らず、倒れて怪我をしたのであらう。……そして地底は夢だと言ふ。が、不思議な事には、其ッ切、侏儒の行衛が知れない。それから、頓馬は事實狂犬として警察に引上げられた。

どッと寐た、和歌子は起てなかつた。が、雀盲は癒えた。……花政の隱居が、財布を頸へ掛けて出張づて、醫師よ、藥よ、と手當をしたのである。

「霧之助樣、霧之助樣。」

熱に浮かされて、もの狂はしく呼續ける。

やゝ、人心地が着いてから、花政が仔細を聞くと――生命に掛けても、槇ケ原の人形が見たい、と言ふ。和歌子は、はじめて戀を知つた。

世故を經た爺樣が、よく情愛を知つて、大く頷いて、死んだ姉娘に婚を取るのだと騷いで、其の人形を、と種々手を廻はした。越中屋長助にも下ぐべからざるに頭を撫でゝ見たが、これば出來さうな事ではない。

「霧之助樣、霧之助樣。」

正氣に成つても、譫言に言續けた。

「お爺さん、大變だ。」

一夜、與四郎が目の色を變て飛で歸つた。

「和歌子さんが、白裝束で、杖に縋つて、槇ケ原の邸へ行つて、皆に酷いめに逢つて居ます……」

爾時、爺さん、節季近の忙いのに、花鋏を投出して、

「さあ、野郎ども、霞町は火事だと思へ、續いて來い。花屋政右衞門、娘の追善に暴れるんだ。」

と、手鍵を杖に、ひよこ〳〵して、

「與四公、こんな時の用に立つ、自轉車で合乘しろい！……」

爺樣が驅着けた時、和歌子を、古井戸の板に眞傾向に倒してあつた。

あの、奥方は、枇杷の根に床几に掛つて、家扶、家從、執事などが取卷いて、書生と車夫が釣瓶を倒にして、和歌子に水を浴びせて居た處である。

花政が手鍵を握つた。

「俺の娘だ、此奴等。」

誰の娘でも構はぬ。……見せる事の成らないと云ふ當御殿の霧之助殿を斷つて拜みたいと申す。御前は旅行中。奥方、應接間でお逢ひなされて、此の上は、當方の思ふ存分に成るか。汚

らはしい身體を清めるが可いか、と訊く、と望む處だと云ふから、恁く計ふのである——念のため當人に聞けとの事である。

和歌子が突伏せられ、おしひらめられながら、蒼白い顔に莞爾して、

「お爺さん堪忍して、思ふやうにさして下さい。」

奥方がしたり顔して、

「それ、背中ばかりでは不可ません。腹の方もお洗ひ。」

「えゝ、衣服は汚え。」

と書生が黒髪を掻攫んで提げるやうに引起したので、痛みに雪の足をかゞめた、宙に釣られたやうである。

「何でもない、霧之助樣に逢ふのには……」

花政の以前に、既に少尉が居て、渠さへ如何とも、詮術を知らないのであつた。

其のまゝ、仰向けにまた引倒して、雪にもみぢを散らすが如く、井戸の水を浴びせたのである。

みどりのしたゝる黒髪は、ぬれ絡はつて、脛もあらはな、裳の其より長かつた。

「何うぞ、霧之助樣に……」

「いゝえ、まだ此の上に、家風に從はねば不可ません。子爵家は儉約を主とします。誰か、糠味噌を掬つて來て、此の女に食べさせなさい。入ものは、犬のが宜い。」

花政は總入歯を嚙碎いた。が、少尉があつて劍を拔かぬものを如何する。

「此も家風です。」

鮑貝に糠味噌を、車夫の手から、頰のあたりへ突着けられて、和歌子が、熟と見る頰を、足を擧げて、足袋の尖で、子爵夫人が、ぐい、と擡げた。

花政が少尉の手を抑へて居た。

「いろと世帶を持つのには、お香物が大事ですとさ、あゝ、おいしい！

子爵夫人が、塵を拂つた。

「明日來なさい。」

屹と和歌子が顔を上げて、

「それも御家風かえ。」

「家風です。」

「何と、」

と、すつくり立上つた。が、病後のつかれと、足の痛みに、よろめいて倒れた時である。

「此處だ、旦那、お拔きなせえ。」

「可。」

長劍の鞘を拂つて、きらりと翳した、師團屈指の腕白大將。

「松平龍介、さあ、撫切だぞ。」

土足で御殿へ踏込んで、霧之助を抱いて、奪つて出た。自分の女の戀人を、男の意氣は潔や。

其の黑小袖の前髪を、胸にひしと締めた時、あはれ見よ、人々よ、和歌子の姿、膚も、衣も

たゞ寒月の光であつた。

玉の指が觸ると鞘走る、黃金づくりの太刀を逆手に、氷の中なる火の如く、乳を薄紅に波打つて、戀に燃えつゝ牡丹の花片散るが如き其の心臟の只中を。

雪靈記事

一

「此のくらゐな事が……何の……小兒のうち歌留多を取りに行つたと思へば――」

越前の府、武生の、佗しい旅宿の、雪に埋れた軒を離れて、二町ばかりも進んだ時、吹雪に行惱みながら、私は――然う思ひました。

思ひつゝ推切つて行くのであります。

私は此處から四十里餘り隔たつた、おなじ雪深い國に生れたので、恁うした夜道を、十町や十五町歩行くのは何でもないと思つたのであります。

が、其の凄じさと言つたら、まるで眞白な、冷い、粉の大波を泳ぐやうで、風は荒海に齊しく、がう〳〵と呻つて、地――と云つても五六尺積つた雪を、押搖つて狂ふのです。

「あの時分は、脇の下に羽でも生えて居たんだらう、屹と然うに違ひない。身輕に雪の上へ乘つて飛べるやうに。」

……でなくつては、と呼吸も吐けない中で思ひました。

丸才十才ばかりの其の小兒は、雪下駄、竹草履、それは雪の凍てた時、こんな晩には、柄にもない高足駄さへ穿いて居たのに、轉びもしないで、然も遊びに更た正月の夜の十二時過ぎなど、近所の友だちにも別れると、唯一人で、白い社の廣い境内も拔ければ、邸町の白い長い土塀も通る。……ザゞッ、がうと鳴つて、川波、山嵐といもに吹いて來ると、ぐる〳〵と廻る車輪の如き濃く黑ずんだ雪の渦に、くる〳〵と舞ひながら、ふわ〳〵と濟まアして内へ歸つた――夢ではない。が、あれは雪に靈があつて、小兒を可愛がつて、連れて歸つたのであらうも知れない。

「あゝ、酷いぞ。」

ハッと呼吸を引く。目口に吹込む粉雪に、ぱッと背を向けて、そのたびに、風と反對の方へ眞俯向けに成つて防ぐのであります。恁う言ふ時は、其の粉雪を、地ぐるみ煽立てますので、

下からも吹上げ、左右からも吹捲くつて、よく言ふことですけれども、面の向けやうがないのです。

小兒の足駄を思出した頃は、實は最う穿ものなんぞ、疾の以前になかつたのです。

しかし、御安心下さい。——雪の中を跣足で歩行く事は、都會の坊ちやんや嬶さんが吃驚なさるやうな、冷いものでないだけは取柄です。ズボリと踏込むだ一息の間は、冷さ骨髓に徹するのですが、勢よく歩行いて居るうちには溫く成ります、ほか〳〵するくらゐです。

やがて、六七町潛つて出ました。

まだ此の間は氣丈夫でありました。町の中ですから兩側に家が續いて居ります。此の邊は水の綺麗な處で、軒下の兩側を、清い浪を打つた小川が流れて居ます。最も其れなんぞ見えるやうな容易い積り方ぢやありません。

御存じの方は、武生と言へば、あゝ、水のきれいな處かと言はれます——此の水が鐵を鍛えるのに適するさうで、釜、鍋、庖刀、一切の名產——其の昔は、聞こえた刀鍛冶も住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、其の中に、柳とゝもに目立つのは旅館であります。

が、最う目貫の町は過ぎた、次第に場末、町端れの——と言ふとすぐに大な山、嶮い坂に成ります——あたりで。……此の町を離れて、鎭守の宮を拔けますと、いま行かうとする、志す處へ着く筈なのです。

それは、——其許は——自分の口から申兼ねる次第でありますけれども、私の大恩人——いえ〳〵恩人で、そして、夢にも忘れられない美しい人の佗住居なのであります。

佗住居と申します——以前は、北國に於ても、旅館の設備に於ては、第一と世に知られた此の武生の中でも、其の隨一の旅館の娘で、二十六の年に、其の頃の近國の知事の妾に成りました……妾とこそ言へ、情深く、優いのを、昔の國主　貴夫人、簾中のやうに稱へられたのが名にしおふ中の河内の山裾なる虎杖の里に、寂しく山家住居をして居るのですから。此の大雪の中に。

二

流るゝ水とゝもに、武生は女のうつくしい處だと、昔から人が言ふのであります。就中、蔦屋――其の旅館の――お米さん（恩人の名です）と言へば、國々評判なのでありました。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜は何方でお泊り。」

「武生でございます。」

「蔦屋ですな、綺麗な娘さんが居ます。勿論、御覽でせう。」

旅は道連が、建場でも、又並木でも、言を掛合ふ中には、屹と此の事がなければ納まらなかつたほどであつたのです。

往來に馴れて、幾度も蔦屋の客と成つて、心得顔をしたものは、お米さんの事を渾名して、むつの花、むつの花、と言ひました。――色と言ひ、また雪の越路の雪ほどに、世に知られた

と申す意味ではないので――此は後言であつたのです。……不具だと言ふのです。六本指、手の小指が左に二つあると、見て來たやうな噂をしました。何故か、――地方は分けて結婚期が早いのに――二十六七まで緣に着かないで居たからです。

（しかし、……やがて知事の妾に成つた事は前に一寸申しました。）

私はよく知つて居ます――六本指なぞと、氣もない事です。確に見ました。しかも其の雪なす指は、摩耶夫人が召す白い細い花の手袋のやうに、正に五瓣で。其が九死一生だつた私の額に密と乘り、輕く胸に掛つたのを、運命の星を算へる如く熟と視たのでありますから――。

また其の手で、硝子盃の白雪に、鷄卵の蛋黃を溶かしたのを、甘露を灌ぐやうに飲まされました。

ために私は蘇返りました。

「冷水を下さい。」

最う、それが末期だと思つて、水を呼んだ時だつたのです。

脚氣を煩らつて、衝心をしかけて居たのです。其のために東京から故郷に歸る途中だつたのでありますが、汚れくさつた白絣を一枚きて、頭陀袋のやうな革鞄一つ掛けたのを、玄關さきで斷はられる處を、泊めてくれたのも、螢と紫陽花が見透しの背戸に涼んで居た。其のお米さんの振向いた瞳の情だつたのです。

水と言へ　、せい〳〵米の磨汁でもくれさうな處を、白雪に蛋黄の情。――葡黄の蚊帳、紅の麻、……蚊の酷い處ですが、お米さんの出入りには、はら〳〵と螢が添つて、手を映し、指環を映し、胸の乳房を透かして、浴衣の染の秋草は、女郎花を黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びつしよりと。」

と汚い病苦の冷汗に……そよ〳〵と風を恵まれた、淺黄色の水團扇に、幽に月が映しました。

……

大恩と申すは此なのです。――

おなじ年、冬のはじめ、霜に緋葉の散る道を、爽に故郷から引返して、再び上京したのでありますが、福井までには及びません、私の故郷からは其から七里さきの、丸岡の建場に俥が休んだ時立合はせた上下の旅客の口々から、もうお米さんの風説を聞きました。

知事の妾と成つて、家を出たのは、其の秋だつたのでありました。

こゝはお察しを願ひます。――心易くは禮手紙、たゞ音信さへ出來ますまい。……

十六七年を過ぎました。――唯今の鯖江、鯖波、今庄の驛が、例の音に聞こえた、中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、前後左右に、高く深く貫くのでありまして、汽車は雲の上を馳ります。間の宿で　世事の用は聊かもなかつたのでありますが、可懷の餘り、途中で武生へ立寄りました。

内證で……何となく顔を見られますやうで、ですから内證で、其の蔦屋へ參りました。

皐月上旬でありました。

三

門、背戸の清き流、軒に高き二本柳、――其の青柳の葉の繁茂――こゝに彳み、あの背戸に團扇を持つた、其の姿が思はれます。それは昔のまゝだつたが、一棟、西洋館が別に立ち、帳場も卓子を置いた受附に成つて、蔦屋の樣子はかはつて居ました。

代替りに成つたのです。――

少しばかり、女中に心づけも出來ましたので、それとなく、お米さんの消息を聞きますと、蔦屋も蔦龍館と成つた發展で、持の此の女中などは、京の津から來て居るのださうで、少しも恩人の事を知りません。

番頭を呼んでもらつて訊ねますと、――勿論其の頃の男ではなかつたが――此はよく知つて居ました。

蔦屋は、若主人――お米さんの兄――が相場にかゝつて退轉をしたさうです。お米さんにまけない美人をと言つて、若主人は、祇園の藝妓をひかして女房にして居たさうでありますが、それも亡くなりました。

知事――其の三年前に亡く成つた事は、私も新聞で知つて居たのです――其のいくらか手當が殘つたのだらうと思はれます。當時は町を離れた虎杖の里に、兄妹がくらして、若主人の方は、町中の或會社へ勤めて居ると、此の由、番頭が話してくれました。一昨年の事なのです。

――いま私は、可恐い吹雪の中を、其處へ志して居るのであります――

が、さて、一昨年の其の時は、翌日、半日、いや、午後三時頃まで、用もないのに、女中たちの蔭で怪む氣勢のするのが思取られるまで、腕組が、肘枕で、やがて、夜具を引被つてまで且つ思ひ、且つ惱み、幾度か逡巡した最後に、旅館をふら〳〵と成つて、とう〳〵恩人を訪ねに出ました。

故と途中、他所で聞いて、虎杖村に憧憬れ行く。……

道は鎭守がめあてゞした。

白い、靜かな、曇つた日に、山吹も色が淺い、小流に、苔蒸した石の橋が架つて、其の奥に大きくはありませんが深く神寂びた社があつて、大木の杉がすら〳〵と杉なりに並んで居ます。入口の石の鳥居の左に、就中暗く聳えた杉の下に、形はつい通りでありますが、雪難之碑と刻んだ、一基の石碑が見えました。

雪の難――荷擔夫、郵便配達の人たち、其の昔は數の旅客も――此からさしかゝつて越えやうとする峠路で、屢々命を殞したのでありますから、いづれ其の靈を祭つたのであらう、と大空の雲、重る山、續く巔、聲ゆる峯を見るにつけて、凄じき大濤の雪の風情を思ひながら、旅の心も身に沁みて通過ぎました。

啜道少しばかり、菜種の畝を入つた處に、志す庵が見えました。佗い一軒家の平屋ですが、門のかゝりに何となく、むかしの狀を偲ばせます、萱葺の屋根ではありません。

伸上る背戸に、柳が霞んで、こゝにも細流に山吹の影の映るのが、繪に描いた螢の光を幻に見るやうでありました。

夢にばかり、現にばかり、十幾年。

不思議にこゝで逢ひました――面影は、黑髪に笄して、雪の褄襠した貴夫人のやうに遙に思つたのとは全然違ひました。黑繻子の襟のかゝつた縞の小袖に、些とすき切れのあるばかり、空色の絹のおなじ襟のかゝつた筒袖を、帶も見えないくらゐ引合はせて、細りと着て居ました。

其の姿で手をつきました。あゝ、うつくしい白い指、結立ての品のいゝ圓髷の、情らしい柔順な髢の耳朶かけて　雪なす頸が優しく清らかに俯向いたのです。

生意氣に杖を持つて立つて居るのが、目めくろめくばかりに思はれました。

「私は……關……」

と名を申して、

「蔦屋さんのお孃さんに、お目にかゝりたくて參りました。」

「米は私でございます。」

と顏を上げて、清い目で熟と覗ました。

私の額は汗ばんだ。――あのいつた額に置かれた、手の影ばかり白く映る。

「まあ、關さん。……おとなにお成りなさいました……」

此ですもの、可懐さはどんなでせう。

しかし、こゝで私は初戀、片おもひ、戀の愚痴を言ふのではありません。

……此の凄い吹雪の夜、不思議な事に出あひました、其のお話をするのであります。

四

その時は、四疊半ではありません。が、爐を切つた茶の室に通されました。

時に、先客が一人ありまして爐の右に居ました。氣高いばかり品のいゝ年とつた尼さんです。

失禮ながら、此の先客は邪魔でした。それがために、いとゞ拙い口の、千の一つも、何にも、

ものが言はれなかつたのであります。

「貴女は煙草をあがりますか。」

私はお米さんが、其の筒袖の優い手で、煙管を持つのを視て然う言ひました。

お米さんは、控へて一寸俯向きました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言ふやうに言ひました。

「關さんは、今年三十五にお成りですか。」

とお米さんが先へ數へて、私の年を訊ねました。

「三碧のう。」

と尼さんが言ひました。

「貴女は？」

「私は一つ上……」

「四綠のう。」

と尼さんが又言ひました。

――略して申すのですが、其處へ案内もなく、づか〳〵と入つて來て、立狀に一寸私を尻目にかけて、爐の左の坐についた一人がありまして――山伏か、隱者か、と思ふ風采で、もの〻應揚な、惡く言へば傲慢な、下手が畫に描いた、奥州めぐりの水戸の黄門と言つた、鼻の隆い、髯の白い、早や七十ばかりの老人でした。

「此は關さんか。」

と、いきなり言ひます。私は吃驚しました。

お米さんが、しなよく頸きますと、

「左樣か。」

と言つて、此から滔々と辯じ出した。其の辯ずるのが都會に於ける私ども、なかま、なかまと申して私などは、もの〻數でもないのですが、立派な、畫の畫伯方の名を呼んで、片端から奴がと苦り、彼め、と顰み、小僧、と呵々と笑ひます――

私は五六尺飛退つて叩頭をしました。

「汽車の時間がございますから。」

お米さんが、送つて出ました。花菜の中を半の時、私は香に噎んで、涙ぐんだ聲して、

「お寂しくおいでなさいませう。」

と精一杯に言つたのです。

「いゝえ、兄が一所ですから……でも大雪の夜なぞは、町から道が絶えますと、こゝに私一人きりで、五日も六日も暮しますよ。」

とほろりとしました。

「其のかはり夏は涼しうございます。避暑に入らつしやい……お宿をしますよ。……其の時分には、降るやうに螢が飛んで、此の水には菖蒲が咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を螢に飛んで、窓には其の菖蒲が咲いたのです――夢のやうです。……あの老尼は、お米さんの守護神――はてな、老人は、――知事の怨靈ではなかつたか。

そんな事まで思ひました。

圓髷に結つて、筒袖を着た人を、しかし、其二人は却つて、お米さんを秘密の霞に包みました。

三十路を越えても、窶れても、今も其美しさ。片田舎の虎杖になぞ世にある人とは思はれません。

ために、音信を怠りました。夢に所がきをするやうですから。……とは言へ、一つは、目に増し、不思議に色の濃く成る爐の右左の人を憚つたのであります。

音信して、恩人に禮をいたすのに仔細はない筈。雖然、下世話にさへ言ひます。慈悲すれば、何とかする。……で、恩人と言ふ、其の恩に乗じ、情に附入るやうな、賤い、淺ましい、卑劣な、下司な、無禮な思が、何うしても心を離れないものですから、ひとり、自から憚られたのでありました。

私は今、其處へ――

五

「あゝ、彼處が鎭守だ――」

吹雪の中の、雪道に、白く續いた其の宮を、さながら峯に築いたやうに、高く朦朧と仰ぎました。

「さあ、一息。」

が、其の息が吐けません。

眞俯向けに行く重い風の中を、背後からスッと輕く襲つて、裾、頭をどッと可恐いものが引包むと思ふと、ハッとひき息に成る時、さつと拔けて、目の前へ眞白な大な輪の影が顯はれます。とぐる〳〵と廻るのです。廻りながら輪を卷いて、卷き〳〵卷込めると見ると、忽ち凄じ

い渦に成つて、ひゆうと鳴りながら、舞上つて飛んで行く。……行くと否や、續いて背後から巻いて來ます。それが次第に激しく成つて、六ッ四ッ数へて七ッ八ッ、身體の前後に列を作つて、巻いては飛び、巻いては飛びます。巖にも山にも碎けないで、皆北海の荒波の上へ馳るのです。――最う此の渦がこんなた捲くやうに成りましては堪へられません。此の渦の湧立つ處は、其の跡が穴に成つて、其處から雪の柱、雪の人、雪女、雪坊主、怪い形がぽッと立ちます。立つて倒れるのが、其まゝ雪の岳のやうに成る……其が、右に成り、左に成り、横に積り、縱に敷きます。其の行く處、飛ぶ處へ、人のからだを持つて行つて、仰向けにも、俯向せにもたゝきつけるのです。

――雪難之碑。――峯の尖つたやうな、其處の大木の杉の梢を、睫毛にのせて倒れました。私は雪に埋れて行く……身動きも出來ません。くひしばつても、閉ぢても、目口に浸む粉雪を、しかし紫陽花の青い花片を吸ふやうに思ひました。

――「菖蒲が咲きます。」――

螢が飛ぶ。

私はお米さんの、清く暖き膚を思ひながら、雪にむせんで叫びました。

「魔が妨げる、天狗の業だ――あの、尼さんか、怪い隱士か。」

雪靈續記

一

機會がおのづから來ました。

今度の旅は、一體はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、其處で、一用を濟ましたあとを、姫路行の汽車で東京へ皈らうとしたのでありました。――此列車は、米原で一體分身して、分れて東西へ馳ります。

其が大雪のために進行が續けられなくなつて、晩方武生驛（越前）へ留まつたのです。强ゐて一丁場ぐらゐは前進出來ない事はない。が、然うすると、深山の小驛ですから、旅舍にも食料にも、乘客に對する設備が不足で、危險であるからとの事でありました。

元來――皈途に此の線をたよつて東海道へ大廻りをしやうとしたのは、……實は途中で決心が出來たら、武生へ降りて許されない事ながら、そこから虎杖の里に、もとの蔦屋（旅館）のお米さんを訪ねやうと言ふ……見る〳〵積る雪の中に、淡雪の消えるやうな、あだなのぞみがあつたのです。で其の望を煽るために、最う福井あたりから酒さへ飲んだのでありますが、醉ひもしなければ、心も定まらないのでありました。

唯一夜、徒らに、思出の武生の町に宿つても構はない。が、宿りつゝ、其處に虎杖の里を彼方に視て、心も足も運べない時の儚さには尙ほ堪へられまい、と思ひなやんで居ますうちに――

汽車は着きました。

目をつむつて、耳を壓へて、發車を待つのが、三分、五分、十分十五分――やゝ三十分聞過ぎて、やがて、驛員に其の不通の通達を聞いた時は！

雪が其まゝの待女郎に成つて、手を取つて導くやうで、まんじ巴の中空を渡る橋は、宛然に玉の棧橋かと思はれました。

人間は增長します。――積雪のために汽車が留まつて難儀をすると言へば――旅籠は取らないで、すぐにお米さんの許へ、然うだ、行つて行けなさうな事はない。がしかし……と、そ

んな事を思つて、早や壁も天井も雪の空のやうに成つた停車場に、しばらく考えて居ましたが、餘り不躾だと己を制して、矢張り一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列車の乗客の中で、停車場を離れましたのは、多分私が一番あとだつたらうと思ひます。

大雪です。

大雪です――が、停車場前の茶店では、まだ小兒たちの、そんな聲が聞こえて居ました。其の時分は、山の根笹を吹くやうに、風もさら〳〵と鳴りましたつけ。町へ入るまでに日もとつぷりと暮れてますと、

「雪やこんこ、
霰やこんこ。」

「爺さイのウ婆さイのウ、
綿雪小雪が降るわいのウ、
雨戸も小窓もしめさつし……」

と寂しい怎しい唄の聲――雪も、小兒が爺婆に化けました。――風も次第に、がう〳〵と樹ながら山を搖りました。

店屋さへ最う戸が閉る。……旅籠屋も門を閉しました。

家名も何も構はず、いま其家も閉めやうとする一軒の旅籠屋へ驅込みましたのですから、場所は町の目貫の向へは遠いけれど、鎭守の方へは近かつたのです。

座敷は二階で、たゞつ廣い、人氣の少ないさみしい家で、夕餉もさびしうございました。

若狹鰈――大すきですが、其が附木のやうに凍つて居ます――白子魚乾、切干大根の酢、碗はまた白子魚乾に、とろ〳〵昆布の吸もの――しかし、何となく可懷くつて涙ぐまるゝやうでした、何故ですか。……

酒も呼んだが醉えません。むかしの事を考えると、病苦を救はれたお米さんに對して、生意氣らしく恥かしい。

兩手を炬燵にさして、俯向いて居ました、濡れるやうに涙が出ます。

さつと言ふ吹雪であります。さつと吹くあとを、がうーと鳴る。……次第に家ごと搖るほどに成りましたのに、何と言ふ寂寞だか、あの、ひつそりと障子の鳴る音。カタ〳〵カタ、白い魔が忍んで來る、雪入道が透見する。カタ〳〵カタ〳〵、さーッ、さーッ、がう〳〵と吹くなかに——見る〳〵うちに障子の桟かバッ〳〵と白く成ります、雨戸の隙へ鳥の嘴程吹込む雪です。

「大雪の降る夜など、町の道が絶えますと、三日も四日も私一人——」

三年以前に逢つた時、……お米さんが言つたのです。

……

「道の絶える、大雪の夜。」

お米さんが、あの虎杖の里の、此の吹雪に……

「……唯一人。」——

私は決然として、身ごしらへをしたのであります。

「電報を——」

と言つて、旅宿を出ました。

實はなくなりました父が、其の危篤の時、東京から飯りますのに、(タダイマココマデキマシタ)と此の町から發信した……偶とそれを口實に——時間は遲くはありませんが、目口もあかない、此の吹雪に、何と言つて外へ出やうと、放火か强盗、人殺に疑はれはしまいかと危むまでに、さん〳〵思惑つたあとです。

ころ柿のやうな髪を結つた霜げた女中が、雜炊でもするのでせう——土間で大釜の下を炊いて居ました。番頭は帳場に青い顔をして居ました。が、無論、自分たちが其の使に出やうとは怪我にも言はないのでありました。

二

「何う成るのだらう……とにかくこれは尋常事ぢやない。」

私は幾度となく雪に轉び、風に倒れながら思つたのであります。

「天狗の爲す業だ、――魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を卷いて居るのだと思ひました。

いのちとりの吹雪の中に――

最後に倒れたのは一つの雪の岳です。――然うは言つても、小高い場所に雪が積つたのではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎに其の吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの數ではない。波の重るやうな、幾つも幾つも、颯と吹いて、むら〳〵と位置を亂して、八方へ高く成ります。

私は最う、それまでに、幾度も其の渦にくる〳〵と卷かれて、大な水の輪に、子子虫か引くりかへるやうな形で、取つては投げられ、攫んでは倒され、捲き上げては倒されました。

私は――白晝、北海の荒波の上で起る處の此の吹雪の渦を見た事があります。――一度は、たとへば、敦賀灣でありました――繪にかいた雨龍のぐる〳〵と輪を卷いて、一條、ゆつたりと尾を下に垂れたやうな形のものが、降りしきり、吹煽つ空中に薄黑い列を造ります。

見て居るうちに、其の一つが、ぱつと消えるかと思ふと、忽ち、ほつと、續いて同じ形が顯はれます。消えるのではない、幽に見える若狹の岬へ矢の如く白く成つて飛ぶのです。一つ一つが皆な然うでした。――吹雪の渦は湧いては飛び、湧いては飛びます。

私の耳を打ち、鼻を捩ぢつゝ、いま、其の渦が乘つては飛び、掠めては走るんです。

大波に漂ふ小舟は、宙天に搖上らるゝ時は、唯波ばかり、白き黑き雲の一片をも見ず、奈落に揉落さるゝ時は、海底の巖の根なる藻の、紅き碧きをさへ見ると言ひます。

風の一息死ぬ、眞空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流も、其の屋根を壓して果しなく十重二十重に高く聳ち、遙に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、果は虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も……お米さんの素足さへ、きつぱりと見えました。が、脈を打つて吹雪が來ると、呼吸は咽んで、目は盲のやうに成るのでありました。

最早、最後かと思ふ時に、鎭守の社が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峯の尖つたやうな眞白な杉の大木を見ました。

雪難之碑のある處――

天狗――魔の手など意識しましたのは、其の樹のせるかも知れません。たゞし此に目標が出來たためか、背に根が生へたやうに成つて、倒れて居る雪の岳の飛移るやうな思はなくなりました。

洵は、兩側にまだ家のありました頃は、――中に旅籠も交つて居ます――一面識はなくつても、同じ汽車に乘つた人たちが、疎にも、それ〴〵の二階に籠つて居るらしい、其れこそ信友が附添つて居るやうに、氣丈夫に賴母しかつたのであります。最も其を心あてに、賴む、――助けて――助けて――と幾度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈火の影の漏れて答うる光もありませんでした。聞こえる筈もありますまい。

いまは、唯お米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ、……寧ろ目を睡るばかりに成りました。

時に不思議なものを見ました――底なき雪の大空の、尙ほ其の上を、ブスリと鑿で穿つて其の穴から落ちこぼれる……大きさは然うです……蠟燭の灯の少し大いほどな眞蒼な光が、ちら〴〵と雪を染め、染めて、ちら〴〵と染めながら、ッ、と輝いて、其の古杉の梢に來て留りました。其の青い火は、しかし私の魂が最う藻脫けて、虛空へ飛んで、倒に下の亡體を覗いたのかも知れません。

が、其の影が映すと、半ば埋れた私の身體は、ぱつと紫陽花に包まれたやうに、青く、藍に、群青に成りました。

此の山の上なる峙の茶屋を思出す――極暑、病氣のため、俥で越えて、故鄕へ歸る道すがら、其の茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれて居ました。――私の顏の色も同じだつたらうと思ふ、手も青い。

何より、嫌な、可恐い雷が鳴つたのです。たゞさへ破れやうとする心臟に、動悸は、破障子の煽るやうで、震へる手に飲む水の、水より前に無數の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。

其の時の苦しさ。――今も。

三

白い梢の青い火は、また中空の渦を映し出す――とぐろを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、峠で屋根に近かつた、あの可恐い雲の峯に宛然であります。

此の上、雷。

大雷は雪國の、こんな時に起ります。

死力を籠めて、起上らうとすると、其の渦が、風で、がうと巻いて、捲きながら亂るゝと見れば、計知られぬ高さから、颯と大瀧を搖落すやうに、泡沫とも、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、降埋める。

「あつ。」

私は又倒れました。

怪火に映る、其の大瀧の雪は、目の前なる、ヅツンと重い、大な山の頂から一雪崩れに落ちて來るやうにも見えました。

引挫がれた。

苦痛の顏の、醜さを隱さうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、外套の袖を被ると、また青い火の影に、紫陽花の花に包まれますやうで、且つ白二羽重の裏に薄萠黃がすッと透るやうでした。

ウオヽヽヽ！

俄然として耳を嚙むだのは、凄く可恐い、且つ力ある犬の聲でありました。

ウネヽヽヽ！

虎の嘯くとよりは、龍の吟ずるが如き、凄烈悲壯な聲であります。

ウオヽヽヽ！

三聲を續けて鳴いたと思ふと……雪をかついだ、大く逞い、しかし痩せた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだやうに立つたのが、吹雪の瀧を、上の峯から、一直線に飛下りた如く

思はれます。忽ち私の傍を近々と横ぎつて、左右に雪の白泡を、ざつと蹴立てゝ、恰も水雷艇の荒波を切るが如く猛然として進みます。

あと、ものゝ一町ばかりは、眞白な一條の路が開けました。——雪の渦が十ウばかりぐる〳〵と續いて行く。……

此を反對にすると、虎杖の方へ行くのであります。

犬の其の進む方は、まるで違つた道でありました。が、私は夢中で、其のあとに續いたのであります。

路は一面、沙々と白い野原に成りました。

が、大犬の勢は衰へません。——勿論、行くあとに〳〵道が開けます。渦が續いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、畝々と螢のやうに飛んで來ました。

眞正面に、凹字形の大な建ものが、眞白な大軍艦のやうに朦朧として顯はれました。と見ると、怪し火は、何と、ツツッと尾を曳きつゝ、先へ斜に飛んで、其の大屋根の高い棟なる避雷針の尖端に、ぽつと留つて、ちら〳〵と青く輝きます。

ウオ、、、、！

鐵つくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋まつた眞中を、犬は山を乘るやうに入ります。私は坂を越すやうに續きました。

ドンと鳴つて、犬の頭突きに、扉が開いた。

餘りの嬉しさに、雪に一度手を支いて、鎭守の方を遙拜しつゝ、建ものゝ、戸を入りました。

學校——中學校です。

唯、犬は廊下を、何處へ行つたか分りません。

途端に……

ざつ〳〵と、あの續いた渦が、一ッづゝ數萬の蛾の群つたやうな、一人の人の形になつて、縱隊一列に入つて來ました。雪で束ねたやうですが、いづれも演習行軍の裝して、眞先なのは刀を取つて、ぴたりと胸にあてゝ居る。それが長靴を高く踏んでづかりと入る。あとから、背

嚢、荷銃したのを、一隊十七人まで數へました。

うろつく物には、傍目も觸れず、肅然として廊下を長く打つて、通つて、廣い講堂が、青白く映つて開く、其處へ堂々と入つたのです。

「休め――」

……と聲する。

私は雪籠りの許を受けやうとして、たど〳〵と近づきましたが、扉のしまつた中の樣子を、硝子窓越に、ふと見て茫然と立ちました。

眞中の卓子を圍んで、入亂れつゝ椅子に掛けて、背嚢も解かず、銃を引つけたまゝ、大皿に裝つた、握飯、赤飯、煮染をてん〳〵に取つて居ます。

頭を掉り、足ふみをするのなど見えますけれども、聲は籠つて聞こえません。

――わあ――

と罵るか、笑ふか、一つ大聲が響いたと思ふと、あの長靴なのが、つか〳〵と進んで、半月形の講壇に上つて、ッと身を一方に開くと、一人、眞すぐに進んで、正面の黑板へ白墨を手にして、何事をか記すのです、――勿論、武裝のまゝでありました。

何にも、黑板へ顯れません。

續いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黑板へ顯れません。

十六人が十六人、同じやうなことをした。最後に、肩と頭と一團に成つたと思ふと――其の隊長と思ふのが、衝と面を背けました時――背つやうに、自棄のやうに、てん〳〵に、一齊に白墨を投げました、雪が群つて散るやうです。

「氣をつけ。」

つゝと驚が片翼を長く開いたやうに、壇をかけて列が整ふ。

「右向け、右――前へ！」

入口が背後にあるか、……吸はるゝやうに消えました。

と思ふと、忽然として、顯はれて、むくと躍つて、卓子の眞中へ高く乘つた。雪を拂へば咽喉白くして、茶の班なる、畑將軍の宛然犬獅子……

ウオ、、、！

肩を聳て、前脚をスクと立て、、耳が其の圓天井へ屆くかとして、嚇と大口を開けて、まがみば遠く黑板に呼吸を吐いた——

黑板は一面眞白な雪に變りました。

此の猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて活きて居る事を信ぜられて居ます——雪中行軍に凝して、中の河内を柳ケ瀨へ拔けやうとした冒險に、敎授が二人、某中學生が十五人、無殘にも凍死をしたのでした。——七年前——

雪難之碑は其の記念ださうであります。

——其の時、豫て校庭に養はれて、鄕導に立つた犬の、恥ぢて自から殺したとも言ひ、然らずと言ふのが——こゝに顯はれたのでありました。

一行が遭難の日は、學校に例として、食饌を備へるさうです。丁度其の夜に當つたのです。が、同じ月、同じ夜の其の命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉ぢるさうです、眞白な十七人が縱橫に町を通るからだと言ひます。——

——後で此を聞きました。

私は眠るやうに、學校の廊下に倒れて居ました。

翌早朝、小使部屋の爐の炊火に救はれて蘇生つたのであります。が、いづれにも、然も、中にも恐縮をしましたのは、汽車の厄に逢つた一人として、驛員、特に驛長さんの御立會に成つた事でありました。

甚だつたな

一

三重子。

「可愛い三重子、可愛い三重子。」

此の子は、私の今住んで居ります町内の――少々間はありますが――斜向ひの家で、おぎい、おぎいと生れました。

煙草專賣局のお勤人の……たしか五女で、末兒でございました。

三十四五に成つて、まだ兒と言ふものゝない家内は、小買ものゝ出入、錢湯などで豫て其の母さんと見知越だつたものでございますから、今度の嬰兒が出來ると、一層親しく成つて、其のお大事な掌中の――珠にしては些と大き過ぎますけれども、何、珠は大くつても更に差支はありません――珠を、遠慮なしに拜借して、それこそ珠のやうに、大事に抱いたり抱へたり、頰邊を嘗めたりしました。

處が、此は……密事と言つても可い、私には内證だつたのでございます。……實は少々お小兒のゝある方には、申上兼ねますが、私は、小兒が大嫌だ――敢て憚る處はない、私は小兒は大嫌……

――と云つて、此の話を、圭吉さんと云ふ友だちが私に話した――

よく其を知つて居るので、細君は一寸抱くに、圭吉か外へ出て留守の時を見計らつたさうである。其處で、主人が餘所から歸ると、自分の家の軒下に、戸外とか云ふものを嬰女に見せながら細君が淋しさうに、嬉しさうに、月の末の勘定の、みそかはあるか知らんと言つたやうな、不思議な優い顏をして立つて居るのを屢ば見た。

但し嬰兒に戸外なるものを見せるより、小母ちやんは、自分が嬰兒の顏にばかり見惚れて居るから、蜻蛉が來ても、蝶が飛んでも、そんな事はお構ひなし。嬰兒の顏に時々頰邊を押附けては伏目に成つて俯向いて居るので、圭吉が町内の大銀杏の下あたりを歸つて來ても、うつか

りして居て、一寸氣がつかない事が毎々であつた。

「おや、お歸んなさい。」

と一寸てれて、目のふちへ上氣をしながら、すた〳〵斜向ふへ驅出して返しに行く。

「暑かつたでせう。お着換へなさいな。」

「何處の……。」

がきだいと云ふ處を、亭主少々薄のろと來て居るから、いまゝで抱いて居た細君に、聊か其の……敬意を表して、

「何處の兒だい？」

「駒井さんの嬰兒ちやんです。」

「何時、生れたんだね。」

「先月よ。……甘いお乳の、堪らない好い匂がしますよ。一寸私の胴の處を嗅いで御覽なさい。」

「いや、暑中につき、御免を蒙る。」

と、言つたばかり。

別に叱言は出ないから、次第に細君は大膽に成つて、例の。圭吉が歸つて來るのを、門に立つて、恁う見ると、

「そら、小父ちやんが歸つて來たよ。」

と落着いたもので、抱直して、密と嬰兒の顏を向けて、

「一寸、御覽なさいな。」

「うゝ。」

「可愛いでせう。」

「うゝ。」

軒並びの御近所の手前、第一、此の嬰兒の、上の女の兒、其上の男の兒などが、居まはりを飛んだり刎ねたりして居る處で、否とは言へない。で、諾とあやふやに言ふと、細君は圖に乘